

北陸自動車道

上越市春日・木田地区発掘調査報告書 III

たかほたけ
高畠遺跡

1986

新潟県教育委員会

北陸自動車道

上越市春日・木田地区発掘調査報告書 III

高畠遺跡

新潟県教育委員会

序

新潟県教育委員会は、昭和47年8月以来北陸自動車道の建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を、日本道路公団との協議の下で実施してきた。

北陸自動車道は、昭和58年に新潟・上越間が開通し、昭和62年には名立インター・チェンジまでの供用が予定されており、全線開通の日も近い。

本書は、上越市春日・木田地区に所在する高畠遺跡に係る発掘調査の記録である。高畠遺跡では、平安時代と中世の遺構、遺物が発見され、先に報告された池田遺跡・一之口遺跡西地区と共に、上越地方における該期の歴史をひもとく上での貴重な資料を提供している。

近年、県内における沖積地の遺跡調査はその件数が増大し、新発見の事実も數多く報告されている。上越地方も例外ではなく、今回の報告をも含め、その調査研究により先人の足跡が明らかになりつつある。埋蔵文化財の発掘調査は、緊急性を帯びたものが多く、遺跡の記録保存を旨とする調査が大半を占めるのは事実である。しかし、その反面、こうした発掘調査により得られた考古学的成果が文献史学と相俟って歴史研究を推し進めていることも確かである。本書がこのような研究の一助となれば幸いである。

本調査にあたって、日本道路公団には格別の御配慮を賜わり、上越市教育委員会並びに上越市民の方々には多大な御協力と御援助をいただいた。ここに深甚なる謝意を表する次第である。

昭和61年3月

新潟県教育委員会

教育長 有磯邦男

例　　言

1. 本書は、上越市春日・木田地区の北陸自動車道法線内に所在する高畠遺跡の発掘調査に係る報告書である。調査は、北陸自動車道建設に伴い、新潟県が日本道路公団（以下道路公団とする）から受託して実施した。調査年度は昭和58年度、昭和59年度に渡る。

2. 発掘調査は新潟県教育委員会が主体となり実施した。調査体制は以下のとおりである。

〈調査体制〉

昭和58年度

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 久間健二）

管　理　総　括　高橋　安　　（新潟県教育庁文化行政課長）

　　管　理　歌代莊平　　（新潟県教育庁文化行政課長補佐）

　　庶　務　飯口　猛　　（新潟県教育庁文化行政課主任）

　　高橋幸治　　（新潟県教育庁文化行政課主事）

　　藤枝セツ　　（新潟県教育庁文化行政課主事）

調　　査　調査指導 中島栄一　　（新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財係長）

　　調査担当 木村宗文　　（新潟県教育庁文化行政課文化財主事）

　　調査員 寺崎裕助　　（新潟県教育庁文化行政課学芸員）

　　丸山謙司　　（新潟県教育庁文化行政課嘱託員）

　　肥田野弘之　（新潟県教育庁文化行政課嘱託員）

調査作業員 藤新田・中屋敷・岩木・薄袋・藤巻・木田・大豆・五智・正善寺地区などの有志
昭和59年度

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 久間健二）

管　理　総　括　高橋　安　　（新潟県教育庁文化行政課長）

　　管　理　大越敏夫　　（新潟県教育庁文化行政課長補佐）

　　庶　務　高橋幸治　　（新潟県教育庁文化行政課主事）

調　　査　調査指導 中島栄一　　（新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財係長）

　　調査担当 岡本郁栄　　（新潟県教育庁文化行政課文化財主事）

　　調査員 寺崎裕助　　（新潟県教育庁文化行政課学芸員）

　　肥田野弘之　（新潟県教育庁文化行政課嘱託員）

　　田中　靖　　（新潟県教育庁文化行政課嘱託員）

調査作業員 藤新田・中屋敷・岩木・薄袋・藤巻・木田・大豆・五智・正善寺地区などの有志

3. 発掘調査では、大・中・小グリッドを設定した。基準杭は、自動車道センター杭STA679である。グリッドは南西角を基準とする。大グリッドは100m×100mが1区画で西から東へ1・2…24、南から北へA・B…Fと進む。中グリッドは20m×20mが1区画で、大グリッドの南西角が1、北東角が25となり、西から東へ南から北へと順に進行する。小グリッドは、2m×2mが1区画で、中グリッドの西から東へI・II…X、南から北へa, b…jと進む。3B23Iaのように呼称する。

4. 道路公団の図面を使用した都合上、方位は北が「地」、南が「天」となることを原則とした。

5. 遺構の略記号は以下のとおりである。

SA—柵列、SB—掘立柱建物跡、SD—溝、SE—井戸、SI—竪穴住居跡、SK—土坑、P—穴

6. 発掘調査による出土遺物は、一括して新潟県教育委員会が保管している。遺物の注記は以下のとおりである。

TA—1次試掘調査、TAT—2次試掘調査、TAA—高畠遺跡A地点、TAB—高畠遺跡B地点。

7. 遺物の実測図は、土器、石器、古鏡、木器に分け、調査ごとに記載する。土器実測図・拓本の断面は、須恵器、珠洲焼が黒塗り、他は白抜きとした。

8. 高畠遺跡出土の木器については、文化庁記念物課 黒崎直氏から、近世陶磁器については佐賀県立九州陶磁文化館 大橋康二氏から御教示を得た。

9. 本書で使用した地形図（第2図）は、昭和57年国土地理院発行の5万分の1地形図「柿崎」、「高田東部」、「高田西部」である。それ以外は、道路公団昭和48年測量の千分の1地形図を使用した。

10. 本書の作成には文化行政課職員があたり、執筆分担は各文末に明記した。

11. 発掘調査から本書の作成に至る迄、下記の方々から多大な御教示、御協力を得た。厚く御礼申し上げる。（敬称略、五十音順）

伊藤正義 植木宏 江坂輝弥 大橋康二 大森勉 小野正敏 金子拓男 黒崎直 小島幸雄 小林達雄

小林宇 齋藤基生 杉山真二 高野武男 高橋勉 土田 孝雄 中村美恵子 花ヶ前盛明 藤原宏志

室岡博 宮腰公健 吉岡廉輔 吉田恵二 渡辺誠

目 次

第Ⅰ章 遺跡の環境.....	1
第Ⅱ章 発掘調査に至る経過	3
第Ⅲ章 発掘調査	3
第1節 試掘調査	3
A 調査の経過	3
B 層序	4
C 調査の結果	5
D 出土遺物	7
第2節 A 地点の調査	12
A 調査の経過	12
B 層序	13
C 造構と遺物	13
西地区の造構	13
西地区の遺物	17
東地区の造構	20
東地区の遺物	25
第3節 A 地点水路部分の調査	27
A 調査の経過	27
B 層序	27
C 造構	27
D 遺物	29
第4節 B 地点の調査	31
A 調査の経過	31
B 層序	31
C 造構	31
D 遺物	32
第Ⅳ章 総括	34
引用文献	37

挿 図 目 次

第1図	高畠遺跡近辺の微地形	1
第2図	高畠遺跡と周辺の古代・中世遺跡	2
第3図	高畠遺跡土層柱状図	4
第4図	試掘調査範囲	6
第5図	試掘調査出土遺物（須恵器、中・近世陶器）	8
第6図	試掘調査出土遺物（須恵器、土師器、灰釉陶器、中・近世陶磁器）	9
第7図	試掘調査出土遺物（須恵器、土師器）	10
第8図	試掘調査出土遺物（石器）	11
第9図	試掘調査出土遺物（木器）	11
第10図	試掘調査出土遺物（古錢）	12
第11図	発掘調査範囲模式図	12
第12図	A地点土層柱状図	13
第13図	A地点西地区遺構平・断面図	折り込み
第14図	SD23、SD56、SK21土層断面図	14
第15図	SE7・10・43・50平・断面図	15
第16図	SE15・22・25平・断面図	16
第17図	A地点西地区出土遺物（縄文土器）	18
第18図	A地点西地区出土遺物（須恵器、土師器、中・近世陶磁器）	19
第19図	A地点西地区出土遺物（古錢）	20
第20図	A地点西地区出土遺物（木器）	20
第21図	A地点東地区遺構平・断面図（上層）	折り込み
第22図	水田跡土層断面図	21
第23図	SE133、143、SK163、182平・断面図	23
第24図	SD129土層断面図	23
第25図	A地点東地区遺構平・断面図（下層）	24
第26図	A地点東地区出土遺物（須恵器、土師器、近世陶磁器）	26
第27図	A地点東地区出土遺物（須恵器、土師器、中・近世陶磁器）	26
第28図	A地点東地区出土遺物（石器）	27
第29図	A地点水路部分土層柱状図	27
第30図	A地点水路部分遺構平・断面図	28
第31図	SD300土層断面図	29
第32図	SE303平・断面図	29

第33図	A地点水路部分出土遺物（須恵器、土師器、中世陶磁器）	30
第34図	A地点水路部分出土遺物（木器）	30
第35図	B地点遺構平・断面図	折り込み
第36図	SI1 B平・断面図	32
第37図	SE 1 B平・断面図	32
第38図	B地点出土遺物（須恵器、土師器）	33
第39図	高烟遺跡遺構配置図	35
第40図	高烟遺跡A地点建物・井戸配置図	36

図 版 目 次

- 図版1 高烟遺跡遠景、A地点西地区発掘スナップ、A地点東地区発掘スナップ
 図版2 A地点西地区・A地点東地区完掘状態
 図版3 B地点完掘状態、A地点水路部分完掘状態、試掘調査遺構確認状態
 図版4 B地点SI 1 B・A地点西地区SE 22・A地点西地区SE 43完掘状態
 図版5 A地点東地区SD 129・SD 131・A地点水路部分SD 300完掘状態
 図版6 A地点東地区SD 56・A地点水路部分SD 300・A地点東地区SK 182土層断面
 図版7 高烟遺跡出土須恵器、土師器
 図版8 試掘調査出土須恵器、土師器、中・近世陶磁器
 図版9 A地点・A地点水路部分出土須恵器、土師器、中・近世陶磁器
 図版10 B地点出土須恵器、土師器、高烟遺跡出土石器・木器・古錢

表 目 次

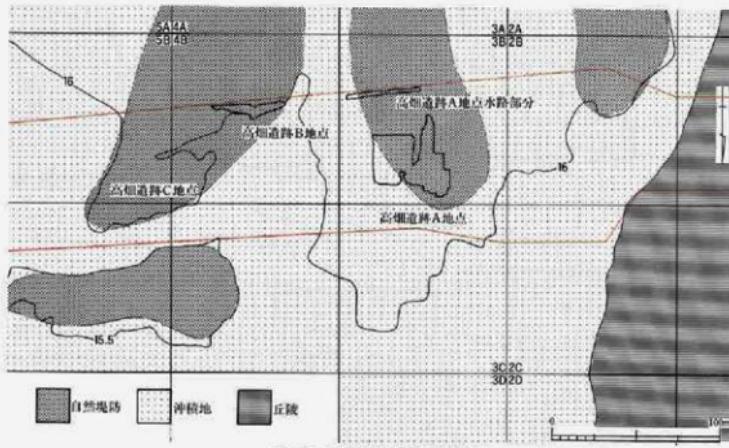
- 第1表 高烟遺跡調査期間····· 4
 第2表 A地点西地区井戸属性表····· 17
 第3表 高烟遺跡の動態····· 36

第Ⅰ章 遺跡の環境

高畠遺跡の所在する上越市は、新潟県の南西部にあり、春日・木田地区は上越市の旧高田市内に位置する。春日・木田地区における地理的・歴史的概観についてはすでに述べられており（岡本 1985、木村 1985）、今回は高畠遺跡及びその近辺に限ってみてみたい。

本遺跡は、新潟県上越市大字岩木字高畠ほかに所在する。本遺跡の所在する岩木地区は、地形的にみて西頸城山地東縁の丘陵、沖積平野（高田面）、正善寺川によって形成されたと考えられる自然堤防に区分される。遺跡は試掘調査の結果、A・B・Cの3地点に絞られたが、これらはいずれも自然堤防上またはその周囲の冲積地に立地している。遺跡が立地している自然堤防は正善川と考えられる流路の変遷により3ブロックに分割されている。A地点は西から二番目の自然堤防上に立地し、標高17m余りを測る。この地点は昭和40年代後半の宅地造成から除外され、宅地前の自然環境が残されていた。現状は杉林で、宅地造成地との比高差は1m余りを測り、島状に小高くなっていた。B地点は東端の自然堤防上に立地し、南から北へ流れる小河川をはさんでA地点と対峙している。標高は16.5m余りで、現在は住宅地となっており、宅造のさいに削平をうけたらしく、10cm余りの盛土下は直ちに黄褐色土（Y層）となっていた。C地点は東端の自然堤防の北端にその中心が存在するものと考えられるが、自然堤防周囲の冲積地にも遺跡のびは認められた。

試掘調査の結果、その冲積地の範囲には河川のよどみ又はたまりではないかと考えられる灰暗褐色土又は灰黑色土（6層）が50~100cmの厚さで堆積し、その下位には灰色を基調とする砂質土（4層）及び下部に植物遺体を含む礫層（7層）が確認された。また、本遺跡は国指定史跡春日山城跡の南東丘陵地の縁辺に位置することから、歴史的にみても周囲には「土井ノ内」・「鉄砲町」・「八反田」など城に関係する地名や中世的な地名がみられる。これらの中で「鉄砲町」・「八反田」の一部は昭和59・60年度に発掘調査が行われ、中世の遺構・遺物が多数検出されている。（肥田野弘之・寺崎裕助）



第1図 高畠遺跡近辺の微地形



第2図 高畠遺跡と周辺の古代・中世遺跡 (国土地理院発行「高田東部」「高田西部」
「柿崎」1:50,000原図 昭和57年発行)

- 1.高畠道路2.春日山城路3.御館路4.佐至徳寺路5.宮野道跡6.木田道跡7.池田道跡8.一之口道跡9.八反田道跡10.鉄砲町道跡

第Ⅱ章 発掘調査に至る経過

北陸自動車道建設に伴う上越市春日・本田地区的発掘調査は昭和57年度の下半期から実施された。昭和57年度の調査は、本田～大豆地区間の自動車道法線内全域の確認調査と一之口遺跡の一部分(14D)の発掘調査であった。春日・本田地区的試掘調査に至る経過及びその結果はすでに報告されており(横山 1985、寺崎 1985)、昭和58年度の調査に至る経過(寺崎 1985)についてもすでに述べられている。

本遺跡の試掘調査については当初昭和57年度中に実施する予定であったが、用地買収が未終了のため行われなかった。しかし、58年2月2日の道路公団との打ち合わせにおいては、道路公団は試掘調査範囲の買収も3月には終了し、その箇所がトンネル掘削工事や法線切土工事で生じる土砂の盛土候補地となっている故、早急に試掘調査を行って欲しいと要望した。また2月4日には道路公団上越工事事務所の工事長も来庁し、早急の調査を切望した。これに対して県教委は、すみやかに調査に着手するとしながらも、その実施期間は早くても4月中旬であると回答した。2月22日に道路公団は58年度発掘調査の要望を県教委に示したが、その中で、本遺跡の試掘調査は7月までに終了して欲しいとされていた。これをうけて県教委では昭和58年度の発掘調査計画を練り、道路公団との協議を行った。その結果、本遺跡の試掘調査は4月12日から行うことになった。

(寺崎裕助)

第Ⅲ章 発掘調査

第1節 試掘調査

A 調査の経過

本遺跡の試掘調査は結果的に一次調査と二次調査に区分される。

一次調査は昭和58年4月12日から4月21日までの間(実働5.5日)に調査員1名・作業員120名・バックフォー2台の規模で行なった。調査では94箇所のグリッドが設定され、約400m²で発掘が試みられた。その結果は26日に日本道路公団上越工事事務所(以下工事事務所とする。)に提示された。それによると発掘調査を要する総面積は約24,000m²で、そのうち遺物包含層が存在するため全て人力で発掘を行う面積は約2,000m²、遺物包含層が存在しないため遺構確認面までバックフォーで掘り下げて調査を実施する面積は約22,000m²であった。また、発掘日数は実働で180日余りと推定された。これをうけて工事事務所は新たな工事工程を示し、高畠遺跡が所在する箇所にはトンネル掘削工事で生じた土砂を盛土したいので8月末までに調査を終了して欲しいと要望してきた。現場サイドでは、8月末終了ということは発掘面積や調査員及び作業員の不足などから類推して不可能であり、今少し検討を加えて11日に回答を行うと答えると同時に、11日の回答については本庁をも含めて今週中に協議を行いたい旨を伝えた。

現場サイドではその後内部検討を行い、11日に次のような回答を工事事務所に示した。
 ①遺物包含層の存在しない箇所については再度試掘調査(二次調査)を行い、遺跡範囲をさらに明確にする。
 ②二次調査はトレーナー法で行い、試掘面積は全体の約10%とする。
 ③調査は西から東へとを行い、遺跡範囲内とされた箇所は直ちに道路公団に引き渡す。
 ④調査に従事する調査員は2名とし、作業員の不足は工事事務所で補ってもらう。
 ⑤二次調査の期間は実働20日をめどとするが、遺構・遺物の出土状況によっては延びる可能性もある。
 ⑥二次調査を行うことによって木田・池田・一之口遺跡の調査に多少の遅れが生じるかもしれない。
 ⑦二次調査に使用するバックフォーは道路公団のものを使用し、グリッド杭の打設も道路公団が

行う。

以上の県教委の回答について、
13日には本府において工事各務所と協議を行い次のような合意をみた。
①二次調査は当初のとおり22,000m²を対象として行い、

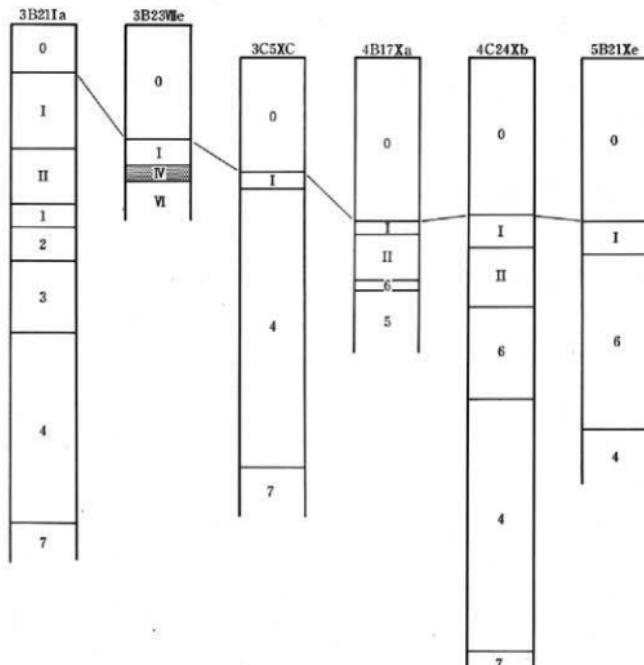
本調査は来年度実施する。
②本遺跡の調査に使用する重機は道路公団のものを用いる。

二次調査は予定どおり5月12日から実施され、途中一時中断したものの6月24日には終了した。

(寺崎裕助)

B 層序

一次調査における本遺跡の基本層序は、調査区（第3図）の東側と西側では層序が著しく異なることが对比が困難であった。反面、隣接する池田遺跡や一之口遺跡とはある程度の对比が可能と思われた。二次調査においても各トレンチごとに土層観察を行い、遺跡全体の基本層序の確立を試みた。第4図に示した土層柱状図は、二次調査の1・2・10・11・13・14トレンチの1地点における層序である。なお、基本層序の名称は57年度発掘調査（寺崎 1985）に従った。



第3図 高畠遺跡土層柱状図（深度：1/30）

基本層序

0層 昭和40年代後半の宅地造成時に客土されたものである。西側より東側が厚く盛土されている。
 I層 宅地造成以前の表土である。灰黒褐色を呈するが場所によっては灰黑色又は明黒褐色である。厚さ20~30cmを測り、須恵器、土師器、中・近世陶磁器、古銭（寛永通宝）が混在して出土する水田であった箇所が多い。

II層 灰黄色又は浅い黄色を呈する。厚さ30~40cmを測り、1・11・13トレンチで確認された。基本的には近世の遺物包含層と考えられているが、今回の調査では遺物は出土しなかった。

IV層 黒褐色を呈し、厚さ10cm余りである。2トレンチの3B23Ⅳ~X c~eと一次調査の4C5X j・4C5Vjグリッド付近で確認された。土師器片が出土している。

V層 黄褐色を呈し、3B12~15・17~19・22~24付近で確認された。西(3B12・17・22)へ行くに従い砂質を帯びてくる。

その他の層序

基本層序については上述のとおりであるが、堆積した時期や広がりなどが不明な土層や河川堆積物と推定される土層については、表示も基本層序とは区別して、算数字で下記のように表わした。

1層 灰黒褐色を呈する。1トレンチの3B21I~III a~eで確認されたが、同トレンチの3B16I~III c~eでは認められなかった。近世陶磁器が出土している。

2層 灰褐色を呈し、炭化物を含んでいる。1層と同様の分布を示し、3B21I~III a~eでは近世陶磁器が出土している。

3層 灰黄色を呈し、酸化鉄を含んでいる。3B21I~III a~eでは確認されたが、3B16I~IV a~eでは認められなかった。

4層 灰色又は灰褐色を呈する砂質土で、1・10・13・14トレンチで確認されている。

5層 灰白色土を呈する。4B17Ⅶ~X a~eから4B12Ⅸ~X h~j付近にかけて確認されている。
 VI層の可能性もうかがえる。

6層 灰暗褐色又は灰黒色を呈する。遺跡東側の11・13・14トレンチで確認され、4B17Ⅶ~X a~eでは10cm、4B24Ⅶ~X c~eでは50cm、5B20Ⅶ~X c~eでは110cm余りの厚さで堆積し、東へ行くに従い厚くなる。河川のよどみ又はたまりではないかと考えられる。

7層 碎層である。遺跡の南西から北東にかけて確認され、木片や木の実などの植物遺体が含まれていることからも河川の堆積物ではないかと考えられる。また場所によっては土師器や須恵器が出土していることから、本層の広がる範囲は古代（平安期）において、河川であった可能性がうかがえる。（寺崎裕助）

C 調査の結果（第4図）

一次調査

本遺跡の一次調査の調査対象面積は約24,000m²であり、調査面積は408m²（全体の1.7%）であった。調査は当初10×10mグリッドの南西隅に2×2mグリッドを設け、バックフローにより掘り下げた。遺跡の傾向がある程度把握された段階で、2×2mグリッドを20×20mに1箇所設けることにした。グリッド総数は94である。

遺物は、94グリッド中40グリッド（約42%）で出土している。出土層位は、10年程前に行われた宅地造成の直前まで耕作されていた水田面と考えられるI層中に集中している。他に、4C4Xj・4C5Vj・Xjのみに確認されたⅤ層（黒褐色土）より平安期の土師器と思われる遺物が10片程出土している（c地点）。この層

は平安時代の遺物包含層として把えることが可能であろう。また、断片的に確認された6層（灰黑色土）からも土師器片が、表土下3.5~4mの地点で確認されている礫層（7層）からも土師器片が3片出土している。遺物は調査対象区のほぼ全域に広がるが、散在して出土するという状況である。I層出土のものは、土師器・須恵器・珠洲焼・近世陶磁器・古錢と様々である。遺構は3B8Xjグリッド付近において、表土下10~20cmの黄褐色土面（Ⅳ層）で堅穴住居跡（推定）1・ピット2が平安時代に対比されるであろう土師器片・須恵器片と共に検出されている。3B8Xjグリッド付近は、他の箇所と比べて一段高くなっている。他にも遺構が残存している可能性が強い。しかし、遺物包含層は確認されていない（A地点）。

以上の調査結果から、本調査は試掘範囲全域を対象にすべきであろう。特に、遺構が検出された一段高い地区及びⅣ層が確認された付近は重要な地点である。また、本遺跡の東半部北側と西半部南側で確認された礫層（7層）を調査対象とするか否かは今後に残された課題である。（丸山謙司）



二次調査

本調査は、昭和58年5月11日の日本道路公團上越工事事務所への回答及び5月13日の工事事務所との協議に基づき、5月12日から6月24日まで（演劇22.5日）行われた。調査対象面積は約22,000m²、発掘面積は約3,000m²で全体の13.6%に及んだ。調査方法は、大グリッドの2Cと3Cの境界を起点として40m毎に幅5mのトレンチを南北に設定し、法面バケット着底のバックフォーで発掘を行い、遺構・遺物の有無を確認した。主なトレンチの調査結果は下記に示すとおりである。

1トレンチ（第4図1T） 調査範囲は東西5m・南北75mである。3C1I~IIIa~eではI層から須恵器・中・近世陶磁器が出土し、同層上面ではワラらしき有機物が認められた。3C1I~IIIa~jでは表土下3.6m余りの深さで礫層（7層）が確認され、その下位からは多量の植物遺体が出土した。

2トレンチ（第4図2T） 拡張区も含めて約170m²の範囲で調査を行った。3B23Ⅹc~eの表

土下1m余りの所で、直径約90cmで暗褐色の覆土を持つ落ち込み（SE50）を検出した。さらに、同グリッドの西側を約60m拡張したところ、竪穴状遺構1・ピット14が黄褐色土（VI層）面において検出された。この遺構群は、一次調査で確認された高台の遺構群（3B8Xj）から続くものと考えられる（A地点）。

3・4・5・6・7・8・9トレンチ（第4図3・4・5・6・7・8・9T）これらのトレンチはA地点の範囲を把握するために設けられた。その結果、A地点の西端は3B12・17と22の一部を含む範囲、東端は3B15・19・24までと予想された。

11トレンチ（第4図11T）4B12Ⅳ～X6～8では第7回のような須恵器・土師器が集中して出土した。この地点の土層は周囲と同じ灰色土であるが、炭化物を含み遺物の出土も炭化物の散布する範囲に限られていた。同地点の南西側を東西20m、南北5mの範囲で拡張して調査を行ったが、集中地点と同じく、炭化物が散布し、遺物も少量であるが出土した。溝等の遺構ではないかとも考えられたが、明確な平面プランや土層断面での落ち込みは確認できなかった。3B17Ⅳ～Xa～e以北には河川跡が乱脈として検出され、その覆土は6層であった。

14トレンチ（第4図14T）最東端のトレンチである。5C1Xbでは径135cmで炭化物が混入した土坑が検出され、5B21Ⅳ～Xc～e以北の6層からは須恵器・土師器が出土した。

17トレンチ（第4図17T）14トレンチで確認された遺跡の広がりを把握するため、5C1Xbを起点に東西方向に設定された。5C2ⅢIVb～cでは径25cmのピット1と多くの土師器片を、5C1V～VIIb～cではピット4と土師器片を検出した。その他、5C1II～IVb～cでは柱根が残存する径20cm余りのピットを検出するなど遺跡範囲は西へ延びて、一次調査で包含層が確認された地点（C地点）に続くものと推測される。

18トレンチ（第4図18T）C地点の南・西端を確認するために設定された。5B21II～IIIf～jでは径20～40cm余りのピット6と須恵器・土師器片が検出されたが、5B21II～IIIe以降では遺構は検出されず、5B16II～IIIg以降では遺物も出土しなかったことから、遺跡の南端は5B16付近と予想される。

19トレンチ（第4図19T）18トレンチの西14mの所に、C地点の西端を再度確認するため設定した。6層を覆土にもつ河川跡と1片づつの須恵器・土師器が検出されたのみであった。このことから遺跡西端は本トレンチから18トレンチの間と推定される。

このように、二次調査では19本のトレンチを調査して本遺跡の範囲をさらに明確にするよう努めた。その結果、遺跡範囲はA（約2,600m²）・C（約3,200m²）（註1）の2地点に絞られたが、この2地点については、一次調査ですべてその存在が確認されており、今回の調査では2地点がより広がりを持つことが確認されたにすぎなかった。また、11トレンチ4B12Xcの南東側に隣接する地点では、工事用道路建設中に遺物が採取され、B地点として登録された。
(寺崎裕助)

D. 出土遺物

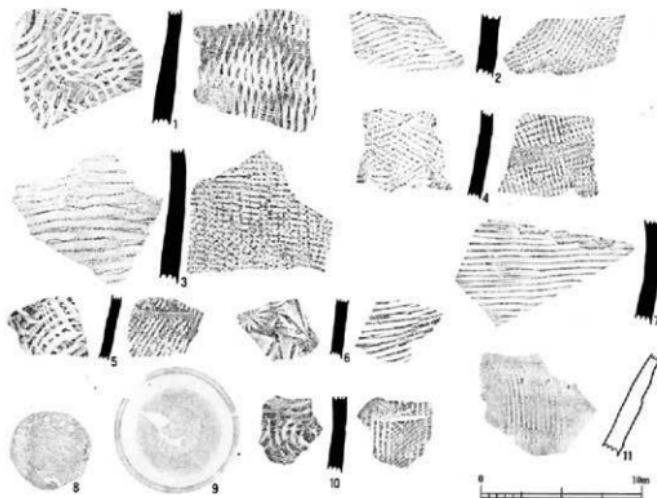
本調査においては多種多様の遺物が出土している。これらの遺物はいずれも小破片で、復元可能なものは数点のみであった。出土状況は散在する程度であり、わずかに11トレンチ4B12Ⅳ～Xb～hでまとまった遺物の出土をみたのみであった。

須恵器（第5図1～6・8～10・第6図1～9・第7図1～10・15～19、図版7-2・3・10・13・17・図版8-1～14）

註1 C地点については、当初高畠遺跡の範囲として調査する予定であった。しかし、遺跡立地や調査状況からかんがみて、鉄砲町遺跡西地区と連続する可能性が強いと考えられるため、鉄砲町遺跡に含めた。

壺（第5図8・9・第6図1～5・第7図3～10、図版7-2・3・図版8-1～4） 無台壺と有台壺の二者がみられる。底径から推定して、第7図5（図版8-4）のように大形のものと第7図6（図版8-2）のように小形のものがみられる。底部の切り離しは第6図4・5（図版8-3）と第7図6・10（図版8-2）が糸切り、第6図3・4（図版8-1）と第7図3・5（図版7-3・図版8-4）はヘラ切りである。第6図5と第7図6は底部と体部の境界がはっきりしており、第7図10の体部下端と底部はやくぼんでいる。第7図7・8の口縁部の内外面にはタール状の炭化物が付着しており、燈明皿に使用されていたものと考えられる。なお、第7図6（図版8-2）の底部には判読不明ではあるが、墨書痕がみられる。第7図4・5の高台は体部と底部の境界よりもやや内面に付され、4の底部から体部への立ち上りは丸味を帯びている。

壺蓋（第7図1・2、図版7-10・図版8-5） 1（5）は大形で天井部は回転ヘラ削りがなされ、縁部は屈曲せず端部はやや外反する。2（10）は中央が突出するつまみを持ち、天井部は回転ヘラ削りがされていない。縁部は屈曲しないが端部は内側に屈曲して小さい。

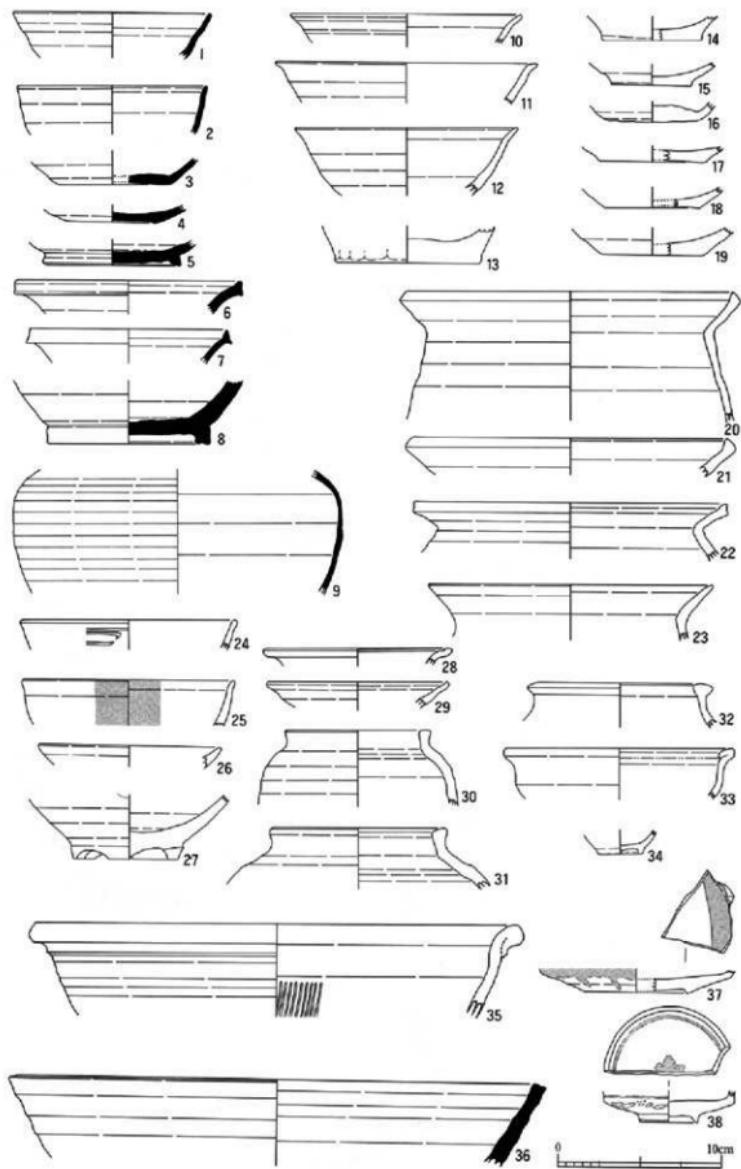


第5図 試掘調査出土遺物（須恵器・中世陶器・近世陶器）

長頸壺（第6図6～8・第7図16・17・19、図版7-17・図版8-7） 6・7は口縁部で7の端部は6に比してシャープで器厚も薄く、焼成も良好である。8（7）・16・17は胴下半部であるが、短頸壺の可能性もある。8・19の底部切り離しはヘラ切りである。

広口壺（第7図18、図版7-13） 肩部から口縁部へと「く」の字状に立ち上がり、肩部から胴へと内反ぎみに屈曲する。肩部には一条の沈線が巡っている。

壺（第5図1～6・10・第6図9・第7図15、図版8-6・8-14） 9の作りはきわめて丁寧で器壁の薄さはきわだっている。焼成も良好で肩部には自然釉の付着もみられる。15（6）の口縁端部は外傾した面をもっている。1～6・10（8-14）は胴部である。青海波と平行沈線（1・6・10）、内外面とも



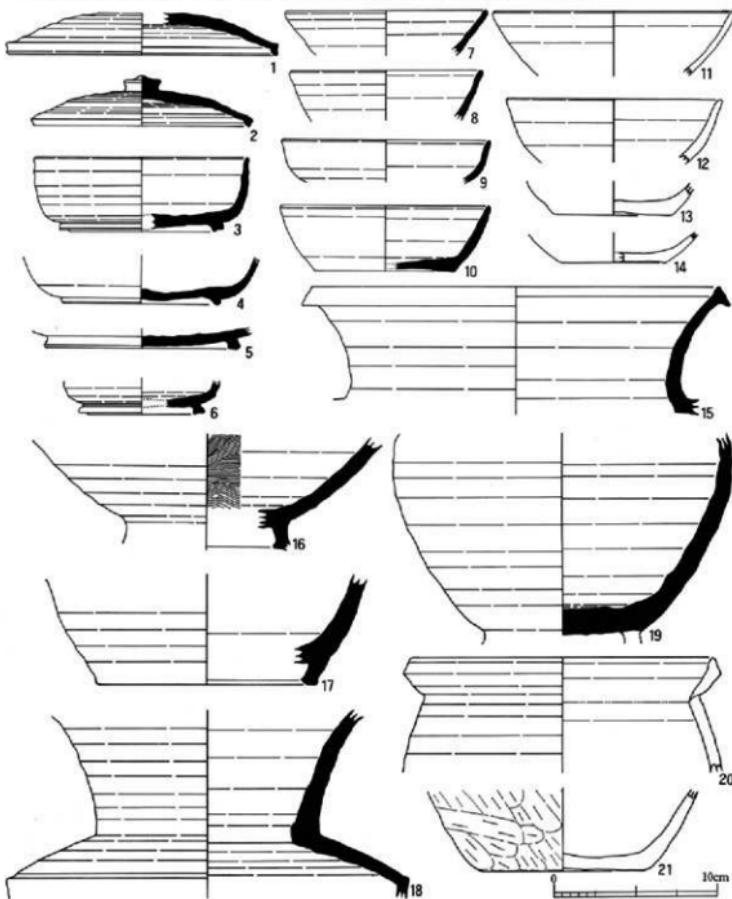
第6図 試掘調査出土遺物(須恵器・土師器・灰陶器・中・近世陶磁器)

平行沈線（2）、格子目と平行沈線（3・4）、平行沈線と放射状沈線（6）などの組み合せが見られる。
土師器（第5図8・第6図12～23・第7図11～14・20・21、図版8～15～19）

环（第6図12・14・15・17～19・第7図11～14、図版8～16～19） 第6図14（18）・17・18・第7図14（18）の底部には回転糸切り痕がみられる。第7図13・14の底部は板状を呈し、体部との境界も明確である。第7図14（18）の内面は黒色処理がなされている。

甕（第5図8・第6図16・20～23、図版7～18・図版8～15） 口縁部は「く」の字を呈し、端部が短く直立または内反するものがほとんどで、23のみが異なる。23の端部は外反し、面を持たず丸くなる。
灰釉陶器（第6図10・11）

小片であるが碗と推定される。10の口縁はゆるやかに、11のそれは鋭く外反する。



第7図 試掘調査出土遺物（須恵器・土師器）

中世陶磁器（第5図7・第6図24・36、図版8-20）

珠洲焼（第5図7・第6図36、図版8-20） 7(20)は甌の胴部で上部断面には漆が付着している。36は播鉢である。口縁端部は外削ぎで丁寧に作られており、焼成も良好である。

青磁（第6図24） 雷文をもつ碗である。口縁部がゆるやかに外湾する。

土師質土器（第6図26） 小片で詳細は不明である。灰褐色を呈し、焼成は良好である。

近世陶磁器（第6図25・27-35・37-38、図版8-22-29）

唐津焼（第6図27-29・33、図版8-26・29） 27(図版8-29)

は高台の三箇所に抉り込みの入った鉢である。高台端部は角張っている。28・29は皿、28は無釉で口縁は溝縁である。32は小形の甌で外面は施釉されているが、口唇部は拭きとられている。33(図版8-26)は折り返し口縁の香炉である。外面には乳白色の釉が施釉されているが、一部に釉のこげつきがみられる。胎土は29が黄褐色の他は全て赤褐色である。

伊万里焼（第6図34・38、図版8-24-25） 34(24)は高台無釉のぐい呑である。38(25)は半磁器の蓋作で、見込み部分にコンニャク判がみられる。

越中瀬戸焼（第5図11・第6図

25・30・31・37、図版8-21-23・

27) 25は天目碗である。30(21)・

31(22)は広口壺で鉄釉の鉄化粧

が施されている。37(23)は口縁部

が直立する皿と考えられる。高

台は削り出し、見込みは内削ぎで

鉄釉が施釉されている。11(27)

は播鉢で卸し目がみられる。胎土

は25・37が暗紫灰色、30・11は黄

灰色、31が赤みがかった褐色である。

産地不明の陶磁器（第6図35、図

版8-28） 折り返し口縁の播鉢で

卸し目が全面にみられる。外面は施釉され、胎土は赤黄褐色で黒っぽい砂粒を多く含んでいる。

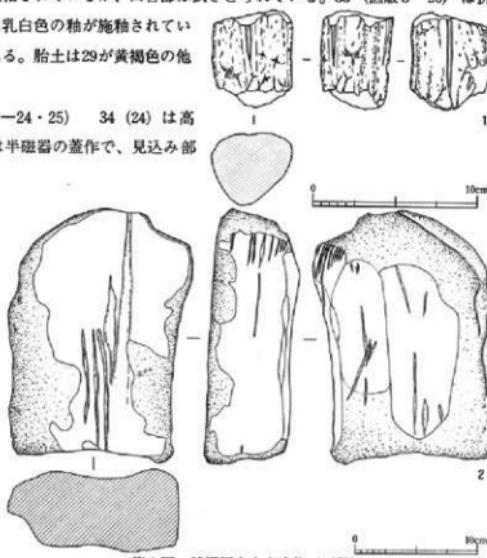
石器（第8図1・2、図版10-7・9）

2点とも砾石である。1(9)は断面が二等辺三角形状を呈し、三面に擦り面をもち一面に有溝がみられる。火熱をうけており、表面は風化している。安山岩製である。2(7)は砂岩製で表・裏面と右側面に擦り面を持つ。それぞれの面には数条の有溝がみられる。

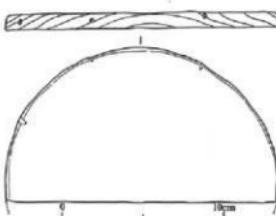
木器（第9図、図版10-12）

曲げ物の底で断面形は台形を呈する。側辺部は丁寧に削られ、径3mm余りの木釘痕が3箇所みられる。

古錢（第10図、図版10-14）



第8図 試掘調査出土遺物（石器）



第9図 試掘調査出土遺物（木器）

寛永通宝・古寛永（寛永3年（1626）～寛文8年（1668））である。

このように本調査では古代から近世までの遺物が出土している。須恵器は壺、土師器は甕などの特徴から9世紀後半以降のもの（坂井1984）が主体を占めるが、11トレンチの遺物集中地点からは

8世紀代の特徴をもつ須恵器（第7図1・5・6・18等）が出土している。また同トレンチでは地点を異にして1個体ではあるが8世紀の土師器（坂井1984）もみられた。中世陶磁器は出土量が少なかったが、珠洲焼には第6図36のような古手のもの（吉岡1977）も出土している。第5図7の甕断面にみられる漆は甕の修理に使用されたものと考えられ、本県におけるこのような類例は中之島村杉之森跡の珠洲焼の甕（駒形1976）にみられる。近世陶磁器では唐津・伊万里・越中瀬戸焼などが出土している。無軸高台・コンニャク判・削り出し高台などの特徴からして17～18世紀の製品（大橋1984、宮田1985）が中心である。（寺崎裕助）



第10図 試験調査
出土遺物(古銭)

第2節 A地点の調査

A. 調査の経過

A地点は、2次にわたる試験調査の結果約2,600m²が発掘調査対象地区に指定されたが、後の道路公団上越工事事務所との協議により東・西地区に2分された。そして工事工程と発掘調査工程との調整を行った結果、西地区は昭和58年度に、東地区は昭和59年度に発掘調査が実施された。なお、東地区的自動車道二期線部分（註2）の発掘調査は実施されていない。発掘予定面積は西地区が約1,700m²、東地区が約900m²である。

西地区（第11図）の調査は、昭和58年5月24日～7月25日（実働38日）まで実施された。発掘総面積は約900m²である。5月

25日、3B24西側の遺構精査が終了し、ひきつづき3B18西側の精査を行いピットを検出する。27日には層序の確認を行い、6月6日より遺構発掘に着手し、27日には確認遺構のほぼ9割を完掘する。29日より遺構の平面実測

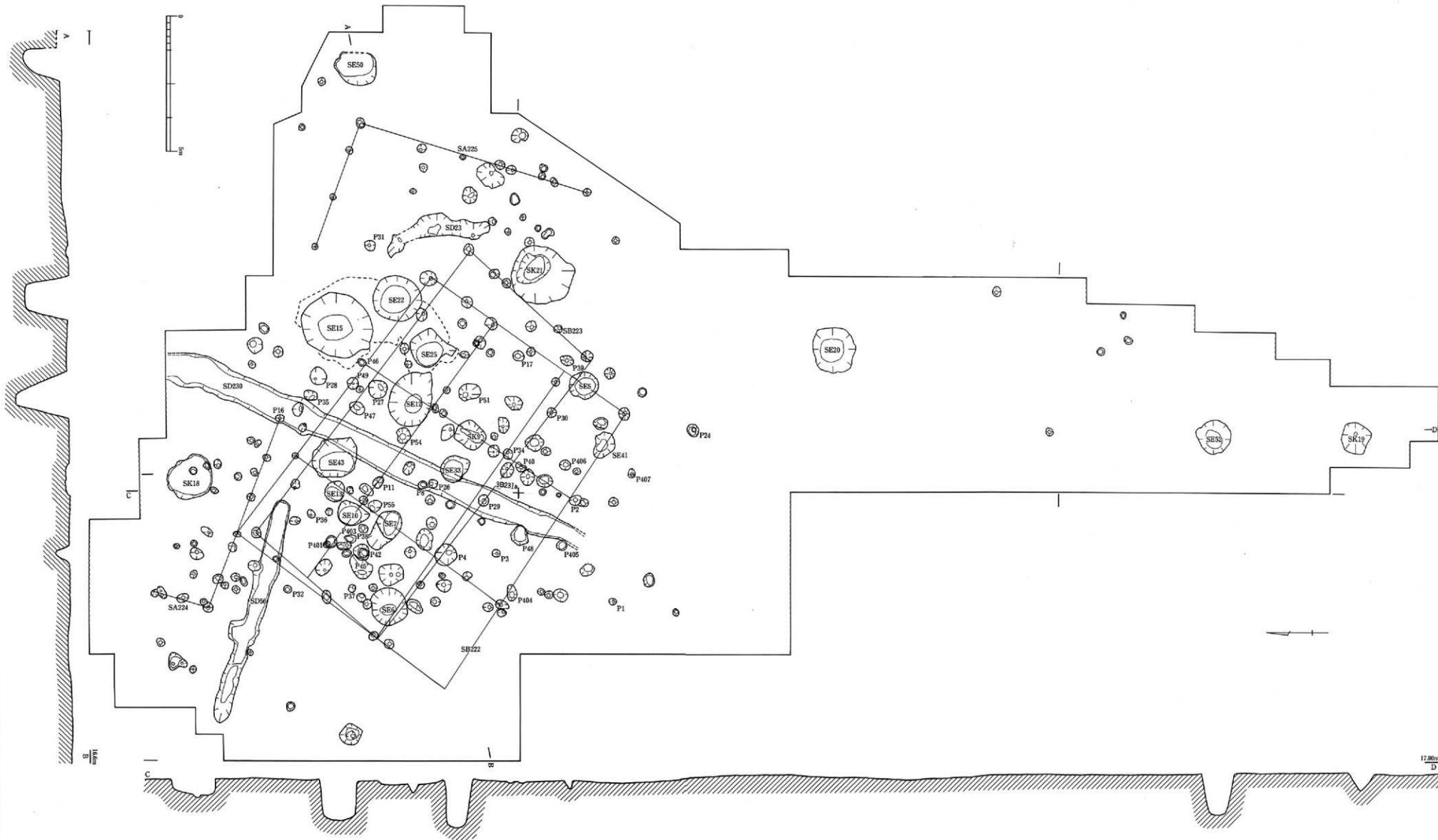


第11図 Kōshū遺跡発掘調査範囲

を開始する。7月7日には雨に悩まされながらも遺構の全体写真を撮影し、個々の遺構の写真撮影に入る。それも13日には終了し、14日以降は井戸の半蔵と深掘りをバックフォーで行う（註3）。新たにピット5、焼土1を検出したが、降雨及びそれに伴う冠水で遺構確認の状態が悪く、詳細な調査は不可能であった。

註2 北陸自動車道は從来四車線であるが、上越インター～富山県朝日インター間では暫定二車線で供用が開始される部分がある。残り二車線部分は第二期線として今回の工事対象から除外されるため、昭和58年度の道路公団との協議の結果、発掘調査区域から除き、第二期線工事の際にあらためて発掘調査を行うこととした。なお、この合意は昭和59年度の調査から有効となる。

註3 春日・本田地区的発掘調査においては多くの井戸が検出された。そのほとんどが素掘りであったため発掘途中の崩落など危険な状態が生じ、完掘できないものもあった。それ故一通りの調査が終了した後、バックフォーで半蔵して断面観察を行い、深さや形状を確認した。また、春日・本田地区的遺跡は沖積地に立地するため、調査面より深所に別の包含層が存在する可能性もうかがえた。そのため、発掘終了後バックフォーで数m掘り下げ、包含層の有無を確認した。



第13图 A地点西地区遗物 平·断面图

この調査も19日には終了し、残りの井戸の半蔵・深掘りを行い25日には調査を完了した。

本調査地区は沖積地に立地するため、調査区周囲に排水溝を埋めし、ポンプを用いて排水にあたった。しかし、地下水位も高く、降雨後の冠水もしばしばで、特に6月下旬以降の梅雨期には調査に支障をきたした。

東地区（第11図）の調査は、昭和59年4月16日～5月19日（実働16日）で実施された。発掘面積は約800m²であったが、ブレロード先行盛土（註4）の関係で約60m²の調査を断念したため、調査面積は740m²余りにとどまった。なお、当地区は春日山トンネル工事によって生じる土砂の盛土用地に当てられ、工事が進行中であったことから調査は緊急を要し、昭和59年度の調査の当初に着手した。

4月18日には層序の確認を行い、バックフォーによる盛土の除去（註5）を開始する。23日から造構確認をはじめ、26日には造構発掘に着手する。5月10日には造構掘りを終了し、11日には気球による1回目の写真測量（註6）を実施する。15日には二枚目の造構確認面の精査を開始し、直ちに造構発掘を行う。17日に東地区東側の低地の造構精査を行い、中・近世の水田跡及びそれに伴う溝状造構を検出する。この調査も17日には終了し、18日にはローブウェイ方式による2回目の写真測量及びバックフォーでの井戸の半蔵を行い、19日には調査を完了した。

（肥田弘之 寺崎裕助）

B. 層序（第12図）

本遺跡の基本層序は第12図に示した通り、ほぼ4層に細分される。しかし、3B19If以南、すなわち自然堤防頂部においては、I層直下がVI層となり、造物包含層であるIVb、IVc層は認められない。以下各層について説明を加える。

I層・褐色を呈する。未分解の腐植土を含み、草木根が卓越している。

IVb層・暗褐色を呈する。古代の遺物を包含する。本層は、3B19Ifにおいて出現し北へ行くほど層厚を増している。

IVc層・暗黃褐色を呈する。炭化物を多く含む。古代の遺物を包含し、IV層と同様に3B19If付近において出現し、北へ行く程層厚を増している。

VI層・黄褐色を呈する砂質土で、含水率の高い部分では灰白

色に近い色調を示す。本層上部から 古式土器の甕 第12図 A地点土層柱状図（深度：1/40）

底部破片が出土している。

以上の各層は、昭和57年度調査（寺崎他 1985）における基本層序にはば対比し得るものである。しかし新しい様相として、IV層がさらに細分され、IVc層が確認された。

（田中靖）

C. 造構と遺物

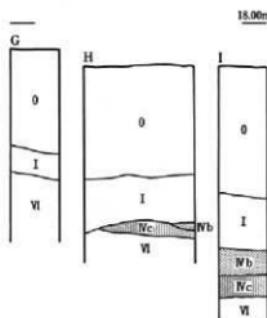
1. 西地区の造構

本地区は北側に造構の集中が見られる。造構は掘立柱建物2・櫛列2・井戸16・土坑3・溝2である。

註4 自動車道のボックス工事などでは、地盤を安定させるためにブレロード盛土を行うのが常である。本来は調査完了後に行うものであるが、昭和58年度の下平期以降は調査工程と工事工程の調整がつかず調査に先行して盛土を行い、調査時には調査区域のみ盛土を除去した。

註5 A地点東地区については、昭和58年6月3日に工事関係者より裸地のままで現場管理上問題が生じるため10cm余り盛土させて欲しいとの要望があった。それに対しては、やむを得ないこととして了解したが、来年度の調査に支障をきたさないよう配慮を望んだ。

註6 昭和59年度は、調査工程と工事工程の調整が昨年度以上に厳しくなると判断し、調査の効率化を図るために写真測量を導入した。



以下、各遺構について記述する。

掘立柱建物

桁行・梁行の柱間寸法や柱穴の法量及び出土遺物から図面上で推定したものである。

SB 222(第13図) 3 B 22Ⅴ-X a~e、3 B 23 I~IV a~eを中心位置する。一部の柱穴は確認できなかったが、3間×3間の縦柱の掘立柱建物跡である。建物の方向は、N-35°-Eである。柱間寸法は、桁行が約4m・梁行が約3mと一定している。柱穴の大きさは、小さいもので径22~36cm・深さ25.4~38.9cm、大きいもので径40~80cm・深さ25~62cmを測る。遺物はいづれも小片であるが、P 2から土師器壺、P 4から珠州焼の擂鉢(第18図27)、P 34から土師器壺、P 46から土師器壺が出土している。

SB 223(第13図) 3 B 22Ⅴ-X a~e、3 B 23 I~V a~eを中心位置し、建物の方向はN-41°-Eである。柱間は桁行が4間・梁行が2間である。柱間寸法は一定しないが、長いもので4m内外、短かいもので2.5m内外に収まる。柱穴の大きさも不定で、径が28~60cm・深さ13.8~67.1cmを測る。遺物は、いづれも小片であるが、P 29から灰陶陶器、P 30から珠州焼の擂鉢(第18図29)、P 47から須恵器壺が出土している。

柵列

掘立柱建物と同様に柱間寸法・柱穴の法量・出土遺物から図面上で推定した。

SA 224(第13図) 3 B 22Ⅴ fにコーナーを持ち、北東方向に聞く柵列である。柵列の方向はN-14°-Eであり、柱間7間で構成され、柱間の寸法は約1.5mである。柱穴の大きさは、径22~44cm・深さ20~48.4cmを測る。遺物は、P 16より土師質土器の壺(第18図7、図版7-6)が出土している。

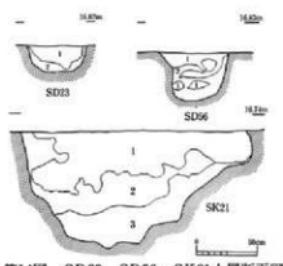
SA 225(第13図) 3 B 23Ⅴ cにコーナーを持ち南西方向に聞く柵列である。柵列の方向はN-17°-Eであり、柱間8間で構成され、柱間寸法は不定である。柱穴の大きさは、径20~40cm・深さ24.3~50cmを測る。遺物は出土していない。

溝

SD 23(第13図・14図) 3 B 23 V bにかかり南北方向に走る溝である。全長約4m・幅48cm・深さ21cmを測る。北端で西に、南端で東に屈曲し消滅する。覆土は2層に分層でき、1層は暗褐色土、2層は黄褐色土からなる。遺物は出土していない。

SD 56(第13図・14図) 3 B 22Ⅴ eにかかり東西方向に走る溝である。全長約8.5m・幅57cm・深さ37cmを測る。調査区内で消滅しているが、西端に長径22.8cm・短径58cm・深さ66.3cmを測る土坑状の落ち込みを有する。覆土は1層が暗褐色土、2層は黄褐色土に灰白色土がブロック状に混入する土層である。西端の落ち込みの覆土も同様で双方の切り合いは不明である。遺物は出土していない。

SD 225(第13図) 調査区北側をほぼ南北に走り、南側は3 B 18 X j付近で消滅する溝である。幅112cm・深さ18cmを測る。覆土は暗褐色土である。須恵器長頸壺(第18図6、図版9-4)・瀬戸美濃縁輪小皿(第18図17)・唐津系青緑釉陶器(第18図13、図版9-18)が出土している。



第14図 SD23、SD56、SK21土層断面図

土坑・井戸

底部に使用時の堆積物と考えられる自然遺物が検出されたものを井戸とし、それ以外を土坑とした。井戸・土坑のうちで埋没状態が複雑なものや湧水による壁面の崩落を免れ、土層断面の観察が可能であったものについては断面実測を実施した。それ以外は土層柱状図をもってその記録とした。

SK 18 (第13図) 3 B23 I f で検出された。平面形は円形で、長径160.4cm・短径150cmを測る。底部は北東から南西に向けてなだらかに傾斜しており、最浅部で31.8cm・最深部で43.7cmの深さを有する。壁面の立ち上がりは垂直に近く、覆土は黒褐色土である。遺物は出土していない。

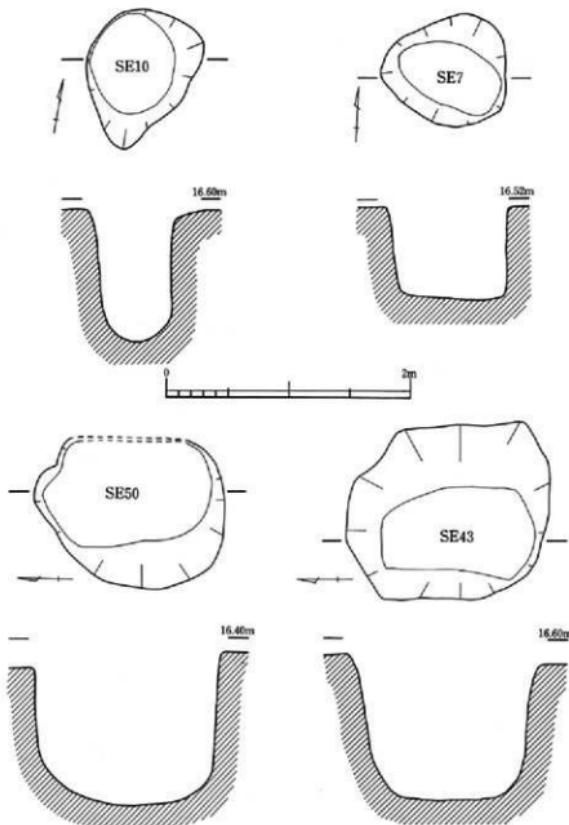
SK 19 (第13図)

3 B13 I e で検出された。平面形は円形で、長径110cm・短径100cm・深さ48.2cmを測る。断面は鑿鉢形を呈し、壁面は西側がなだらかに、東側がやや急勾配に立ち上がる。覆土は黒褐色土で、小片であるが土師器が出土している。

SK 21 (第13図)

3 B18 Vi で検出された。平面形は円形で、長径240cm・短径210cm・深さ94cmを測る。壁面は、南西方向がなだらかに、北東方向がやや急に立ち上がる。覆土は、1層が暗褐色土、淡

黄色砂質土、灰色土がブロック状に混入する。2層は明黄灰色土に1層がブロック状に混入する。3層は1層に地山の黄褐色土がブロックとして混入する。土師質土器の壺 (第18図9) 珠洲焼の鑿鉢 (第18図14) が出土しているほか、近世陶器の小片が一点出土している (註7)。

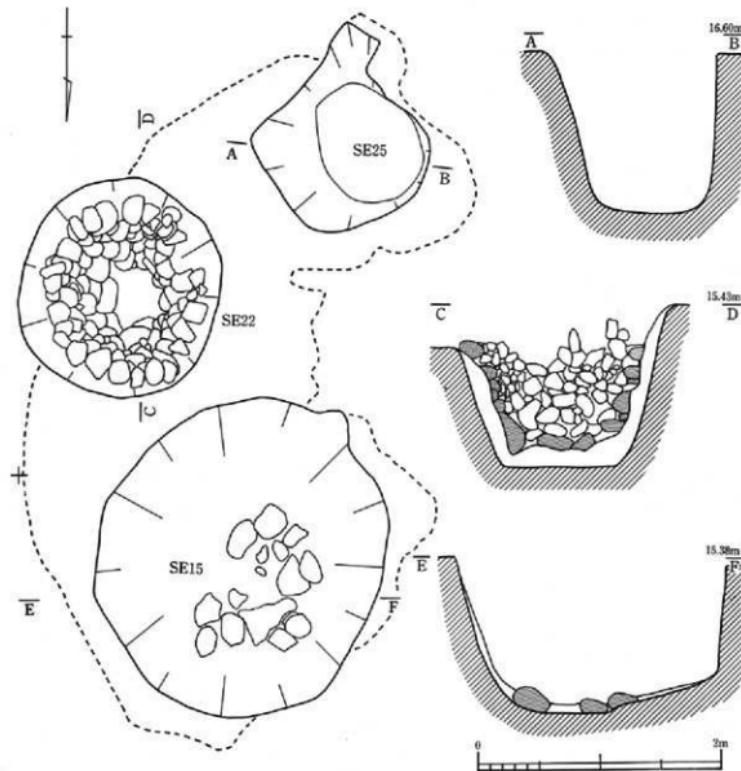


第15図 SE 7・10・45・50 平・断面図

SE 7 (第13、15図) 3B22Ⅹ cで検出された。平面形は歪んだ橢円形を呈し、長径102cm・短径90.4cm・深さ74cmを測る。底部は平らで、立ち上がりはほぼ垂直である。覆土は黒褐色土で、青磁碗（第18図15 図版9-16）、漆塗り木製品が出土している。

SE 10 (第13、15図) 3B22Ⅹ dで検出された。平面形は円形である。開口部径86cm・深さ108cmを測る。底部は丸みを帯び、壁面の立ち上がりは垂直に近い。覆土は、黒褐色土に灰白色土がブロック状に混入する。土師器甕・曲物底部（第20図3、図版10-13）曲物側板の留め具に使用したものと推定される桙の樹皮（図版10-11）が出土している。

SE 43 (第13、15図) 3B23Ⅰdで検出された。平面形は歪んだ隠丸方形で、長径155cm・短径140.2cm・深さ121cmを測る。底部は平らで、壁面の立ち上がりは垂直に近い。覆土は黒褐色土に黄褐色土のブロックが混入したものである。土師器甕・漆塗の椀（第20図-1）が出土している。



第16図 SE15・22・25 平・断面図

註7 SK 21から近世陶器の小片が出土している。しかし、本調査区はSD 230以外に近世の可能性がある遺構は検出されておらず、覆土からみても、SK 21は、中世の土坑と考えられる。

III 発掘調査

SE 50 (第13-15図) 3B23Ⅲcで検出された。平面形は円形であるが、試掘調査時に東側一部を欠損している。径140.2cm・深さ120.8cmを測る。底部は丸みを帯び、壁面の立ち上がりはほぼ垂直である。覆土は、黒褐色土に、青灰色土がブロック状に混入する。枕状木製品（第20図2）が出土している。

SE 15 (第13、16図) 3B23Ⅲd検出の石組み井戸である。平面形は円形で長径260cm・深さ120.6cmを測る。底部はやや丸味を帯び、石組みの一部であったであろう礫が散かれている。壁面の立ち上がりは西側が垂直に近く東側はやや開く。覆土は、黒褐色土に淡黄色砂質土がブロック状に混入する。石組み掘り形の埋土は、灰黄褐色土と暗褐色土が互いにブロック状に混在している。土師質土器の壺（第18図11、図版9-9）が出土している。

SE 22 (第13-16図) 3B23Ⅳcで検出された石組み井戸である。平面形は円形で、径170.8cm・深さ130.1cmを測る。底部は平らで、壁面の立ち上がりは未広がりとなる。覆土は黒褐色土、掘り形の埋土は黒褐色土と黄褐色土がブロック状に混入したものである。土師質土器の壺（第18図8）が出土している。

SE 25 (第13図、第16図) 3B23Ⅲbで検出された。平面形は隅丸方形を呈するが、一部に歪みを生ずる。開口部は一辺120cm・深さ130.2cmを測る。底部は平らで、壁面の立ち上がりは西側がほぼ垂直で東側はやや開く。覆土は黒褐色土である。土師器が出土している。

SE 15・22・25の遺構完掘後、精査により黄褐色土と黒褐色土の混在土が認められた（第16図破線部分の内側）。井戸の掘り形と思われるが著しい湧水と地山の崩落により確認は不可能となった。故に平面プランのみを報告する。SE 5、SE 6、SE 9、SE12、SE13、SE20、SE33、SE41、SE52について、その属性は第2表に記す。

P 42 (第13図) 3B23Ⅹcで検出された。径34cm、深さ49.9cmを測る。覆土は暗褐色土であり、底部に焼土が認められた。本ピットと周囲を深掘りしたが、円形で径約60cmの焼土プランが検出されたのみであった。焼土の性格は不明である。遺物は、土師器甕が出土している。
(肥田野弘之)

井戸	検出グリッド	開口部長径	開口部短径	深さ	覆土	出土遺物
SE 5	3B18IIi	110.0cm	95.0cm	98.0cm	黒褐色粘質土	蝶洲焼(楕円、圓)
SE 6	3B22VIIc	142.0cm	130.2cm	104.0cm	黒褐色粘質土+灰白色粘質土 ブロック	土師器(鏡)
SE 9	3B23 I a	110.0cm	89.5cm	109.1cm	黒褐色粘質土+灰白色粘質土 ブロック	土師器(鏡)
SE 12	3B23 II b	204.0cm	154.2cm	159.2cm	黒褐色粘質土+黄褐色粘質土 ブロック	土師器(杯唐)
SE 13	3B22 IX d	74.0cm	70.1cm	108.2cm	黒褐色粘質土+黄褐色粘質土 ブロック	なし
SE 20	3B13 III e	166.5cm	154.3cm	110.9cm	黒褐色粘質土	蝶洲焼(楕円) 土師質土器(杯)
SE 33	3B23 I b	100.5cm	85.0cm	145.3cm	黒褐色粘質土	なし
SE 41	3B18 II i	102.5cm	80.0cm	83.8cm	黒褐色粘質土+黄褐色粘質土、灰 色粘質土、淡黄色粘質土、瓦質土	なし
SE 52	3B13 I h	124.0cm	117.5cm	120.9cm	黒褐色粘質土+黄褐色粘質土 ブロック	土師器(鏡)

第2表 A地点西地区井戸属性表

2、西地区の遺物

本地区は、出土遺物量が平箱4箱程で小片が多く、また復元・実測が可能なものは少なかった。遺物は、表土からの出土が大半で、縄文時代・古墳時代・近世のものも見受けられるが、平安時代と中世のものが多くを占める。以下、それらについて記述する。

縄文土器（第17図）

P 27より1片出土している。表面にかすかに縄文がみられる。なお、同ピットより土師器も出土している。

須恵器（第18図1～6、図版7-2・7・図版9-1・4）

壺（第18図1～5、図版7-2・7・図版9-1） 有台壺と無台壺がみられる。

第18図1(2)の底部には糸切り痕が、第18図2(7)・5(1)の底部にはヘラ切り痕が認められる。1の体部下端は丸味を持ち、口縁端部は外反する。2は暗赤褐色を呈し、胎土中に白色でやや大粒の砂粒を含み、焼成は堅緻である。底部には板目と思われる圧痕がみられ、体部は直線的に立ち上がる。5の高台端部は内側へ丸くなっている。4はP42、2・3はP401、4はP405より出土している。

長頸壺（第18図6、図版9-4） 底部にはヘラ切り痕がみられ、高台は外側へ踏んぱり、接地面は高台のほぼ全面にわたる。体部の欠損部は底部から4cm余りで平均し、割れ口も揃っており、一見皿状である。また底部内面に打痕らしき傷が全面にわたって多数みられることから、敲き台等に再利用されたとも考えられる。SD 225より出土している。

土師器（第18図10・19～24、図版7-11・12・15・20～22）

壺（第18図10） 体部はゆるく内湾しながら立ち上がり、口縁端部はやや外側を向く。P402から出土している。

壺（第18図19～24、図版7-11・12・15・20～22） 小形のもの（第18図19・20・21、図版7-11・12・15）と大形のもの（第18図22・23・24、図版7-20～22）がある。口縁は全て「く」の字状に外反して立ち上がるが端部が短く直立するもの（第18図19・20・23・24）とそうでないもの（第18図21・22）がみられる。21(12)の端部は面をもたず丸く仕上げられ、22(20)のそれはやや内湾ぎみであるが同様に丸く仕上げられている。なお、22の内面下部には青海波状のタタキ目が、20の胸下部にはヘラ削りの痕跡が認められる。19はP38、20・22はP42、21はP28から出土している。

中世陶磁器（第18図7～9・11・12・14～18・25～31、図版7-6・図版9-9～16）

土師質土器（第18図7～9・11・12、図版7-6・図版9-9） 第18図7（図版7-6）の底部には糸切り痕が認められ、底部と体部の境界は強いナデにより明瞭な棱をなす。体部は外反して立ち上がるが口縁部はやや内湾ぎみとなる。8・9・12の口縁部は直線的に外反する。にぶい赤褐色又は黄褐色を呈し、焼成は良好である。第18図7（図版7-6）はP16、8はSE22、9はSK21、11（図版9-9）はSK15、12はSE20から出土している。なお7と11は同一個体であるが異なる遺構から発見された。

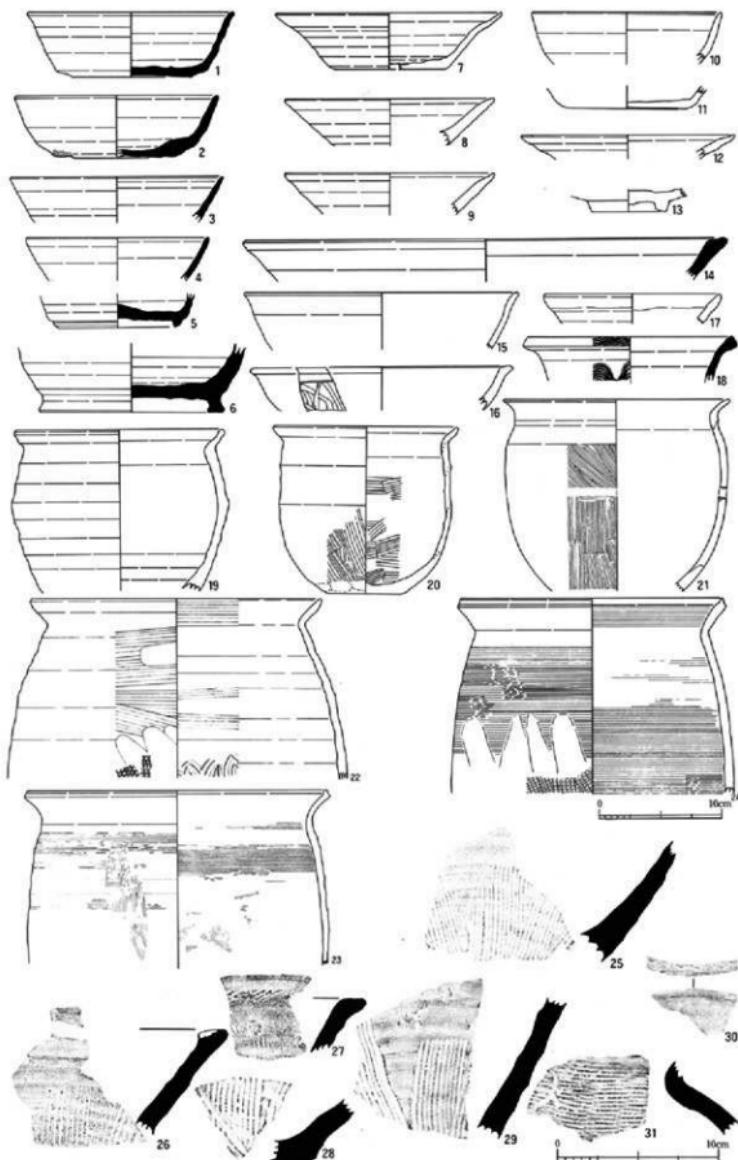
珠洲焼（第18図14・18・25～31、図版9-10～13） 撥鉢（第18図14・25～29、図版9-12・13）・壺（第18図18・30、図版9-10）・甕（第18図31、図版9-11）が出土している。撥鉢の口縁形態は、端部が厚くなり、口唇部はややくぼむが面をもつもの(14)、口唇部が内側に突出するもの(26)、口唇部が外側へ突出するもの(27)に3分される。鋤し目は太くて粗く、26(13)と29では一単位10本を数える。27の口唇部には柳目波状文が施されている。18(10)は頸部から口縁部にかけてやや開きながら立ち上がり、口縁端部はさらに外反し肉厚となり、口唇部に面を持っている。口唇部と頸部に柳目波状文が施されている。31(11)の肩部にはヘラ記号がみられる。14はSK21、18はSE52、25はSE5、26はSE20、27はP4、28はP3、29はP30から出土している。

瀬戸美濃焼（第18図17） 緑釉小壺である。口縁部は直線的に外反し、端部は施釉により肉厚となる。胎土は灰白色で緻密、釉はくすんだ緑色である。SD 230から出土している。なお、SD 230からは近世陶磁器が出土し、胎土も緻密で灰白色を呈することから越中瀬戸焼の可能性もすてきれない。

青磁（第18図15・16、図版9-15・16） 瓢の小片が出土している。15(15)の体部は内湾して立ち上



第17図 A地点西地区
出土遺物(縄文土器)



第18図 A 地点西地区出土遺物（須恵器、土師器、中・近世陶磁器）（1～21は35）

り、口縁部は外反して口唇部は丸くなる。胎土は暗灰色で釉はややくすんだ緑色である。16(16)の体部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は外側へ突出し口唇部に面を持つ。体部外面には沈線で蓮弁文様が描かれ、釉は緑がかかった青色を呈する。胎土は15と同じく暗灰色である。15はSE7から出土している。

白磁(図版9-14)口禿げの白磁が1片出土している。小片のため詳細は不明である。

近世陶磁器(第18図13、図版9-18)

見込み部分は内側げで、釉は黄色味がかった茶褐色である。唐津系の青緑釉陶器と考えられる。SD230から出土している。

古銭(第19図、図版10-15)

表土出土の寛永通宝である。「實」より新寛永銭と考えられる。

木製品(第20図、図版10-10・11・13)

椀(第20図1)全体に黒漆が塗られ、体部内外面には朱漆で文様が描かれている。SE43より出土している。

杭状木製品(第20図2、図版10-10)先端が削られ尖っている。用途は不明である。SE50から出土している。

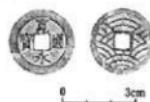
曲物(第20図3、図版10-13)底板である。侧面に木釘痕がみられず、径も8.5cmと小さいことから柄杓等の底板とも考えられる。SE10より出土している。

桜の樹皮(図版10-11)幅5cm余りである。さらに細長く裁断して曲物の止め具に使用したものと推定される。

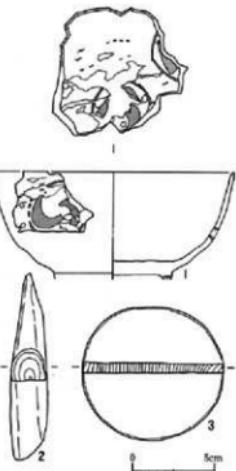
このような古代～近世の遺物において、須恵器は环の形態から今池遺跡SK257・102・SD201の資料(坂井 1984)と類似するものがみられる。第18図1は8世紀末～9世紀初頭、2は9世紀前半、5は9世紀中葉に比定されるであろう。土師器の甕は口縁端部は形態及び整形技法からみて、19・20・22は8世紀末～9世紀初頭(坂井 1984)の年代が与えられるが、20・22については年代が若干上がるかもしれない。21は口縁形態もさることながら、胎土中に粗い砂粒が多く含み、器面に刷毛目調整がみられることから古墳時代～奈良時代にかけてのものであろう。23・24は口縁端部が若干の屈曲をみながら短く立ち上ることが9世紀中葉(坂井 1984)の年代が考えられる。珠洲焼については、擂鉢と蓋の口縁形態から18がⅣ期(吉岡 1981)に、14・26・27がⅤ期(吉岡 1981)に比定され、14世紀～15世紀前半の年代が与えられるよう。土師質土器は口縁部が内湾ぎみ又は直線的に外反し、器高が高く、底部が偏平で糸切り痕をもつ、類例が中之島村杉之森遺跡(戸根 1976)で出土している。また、形態的に似ているが底部にヘラ切り痕をもつものは水原城館址(川上 1977)で発見されている。しかし、その年代については伴出遺物がはっきりせず不明である。近世陶磁器については、13が唐津系の青緑釉陶器ならば17世紀後半～18世紀前半(大橋 1984)に比定される。(肥田野弘之・寺崎裕助)

3. 東地区の遺構

本地区から検出された遺構は、Ⅳc層上面で確認されⅣb層を覆土とするものと、Ⅵ層上面で確認されⅣc層を覆土とするものに大別される。ここでは、前者を上層の遺構、後者を下層の遺構と分けて報告したい。なお、自然堤防頂部のⅣb・Ⅳc層が存在しない場所では、全ての遺構がⅥ層上面で確認されたために、上下層の識別は覆土の比較によった。



第19図 A地点西地区出土遺物(古銭)



第20図 A地点西地区出土遺物(木器)



第21図 A地点東地区遺構 平・断面図(上層)

上層の造構

上層の造構としては、水田跡3・井戸3・土坑4・掘立柱建物1・溝8・ピット約150で、主に自然堤防北斜面に集中している。以下具体的に各造構の説明を行う。

水田跡（第21・22図）

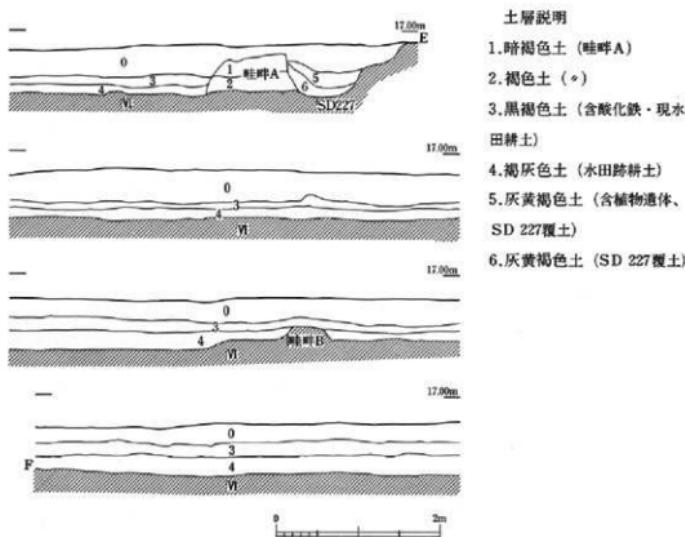
今回の調査で検出された水田跡は、いずれも現水田面下20cm前後のⅣ層上面に構築されていた。そのため畦畔の高まりは、ほとんど耕作により失われており、遺存状況はあまり良好とは言えなかった。しかし水田跡内部ではⅤ層が還元され暗青灰色を示すに対し、畦畔部分ではⅤ層本米の色調を残していた事から、水田跡及び畦畔の範囲を確認する事ができた。

各水田跡は調査区の制約で、いずれも不完全なものであったが、その形状は1不正円形、2・3長方形をなすものと思われる。また検出面積は、それぞれ45.1m²・24.3m²・46.4m²である。畦畔は第13図で示したように断面台形をなし、幅（下場）及び高さはA100cm・40cm、B80cm・15cmで、規模の大きな畦畔Aは、今まで継続して使用されていた。

水田跡に付随する施設としては、用水と考えられるSD 227と道路状造構がある。

SD 227は畦畔Aに沿っており、同畦畔と共に今まで継続して使用されていたものと考えられる。本溝は、その流水方向が東西で、幅（上場）90cm、断面「U」字形を呈する。

道路状造構は幅4.8mを測り、水田跡3の北東隅で「L」字状に曲がっている。本跡は、さらに南方に伸びていくものと推察されるが、自然堤防頂部では、確認する事ができなかった。



第22図 水田跡土層断面図

次に水田跡の年代について考察したい。本水田跡は古代の包含層であるⅣb層を、完全に破壊して構築されている事から、中世以降にその上限を求められよう。また下限は、本跡に伴う道路状造構が明治28年の更正図に記録されていない事から、それ以前に機能を終えていたものと考えられる。さらに、水田

耕作土より検出された最も新しい遺物が、第25図11の伊万里焼である事も、その年代を裏付けるものと言える。

井戸（第21・23図）

3基確認され、いずれも井戸枠を持たない素掘り井戸である。

SE 140（第21図）自然堤防頂部において検出され、径1m・深さ1mを測る。本井戸からは、全く遺物が出土していないため詳細な時期は不明である。また覆土もSE 133・143とは異なり、他の2基とは時期差が想定される。

SE 143（第21・23図）自然堤防頂部から北斜面に移行する変換点に位置し、径1m・深さ1.4mを測る。その土層堆積状況は、第23図に示した通り、自然堆積の5層以下と井戸廃棄後人為的に埋めもどされた4層以上に大別される。前者は使用時に堆積したものと思われ、トチの実やヒヨウタン等の植物遺体を多量に含んでいる。後者は4層に細分され、2層上面から人頭大の石が投入された形で出土しているほか、遺物の出土はなかった。このように井戸廃棄時のある段階で石が投入された例は、下新町遺跡SE 15（田海1984）や子安遺跡SE 37（戸根1984）で知られており、埋井に際しての呪儀に關わる行為と考えられる。本跡からは全く遺物が出土していないため、時期を明確にし得ないが、SD 131を切って構築されている事や覆土から平安時代の造構と考えられる。

SE 133（第21・23図）自然堤防北斜面に位置し、径1~1.2m・深さ1mを測る。また検出面下20cmの所に、幅10cm前後のテラスが設けられている。本井戸も全く遺物が出土しておらず、時期を特定する事はできない。しかし、覆土がSE 143に近似することから、それとほぼ同時期に存在していたものと考えられる。

土坑

4基確認され、すべて3B18の自然堤防北斜面に存在する。

SK 182（第21・23図）長径2.5m・短径1.7m・深さ60cmの不整円形の土坑である。東側に1段テラス状の平坦部が作り出され、一見2つの土坑が重複しているかのように見える。本坑は人為的に埋め戻されており、その埋土から第25図6の須恵器短縁蓋及び土師器小片が出土している。

SK 163（第21・23図）長径1.8m・短径1.4m・深さ70cmの不整円形の土坑で、IV b層に近似した暗褐色土を覆土にしている。本坑からは、微細な炭化物が少量検出された他遺物の出土は無かった。

SK 171（第21図）長径1.5m・短径80cm・深さ12cmの不整円形の土坑で、多量に炭化物を含み暗褐色土を覆土にしている。本坑も全く遺物が出土しなかった。

SD 213（第21図）長径1.3m・短径90cm・深さ10cmの隅丸方形の土坑で、覆土はSK 171に近似している。本坑も全く遺物が出土しなかった。

これらの土坑は、遺物を伴わない例が多く時期を特定する事はできないが、狭い範囲に集中している事と覆土が一様にIV b層を基調にしていることから、いずれも平安時代の造構と考えられる。

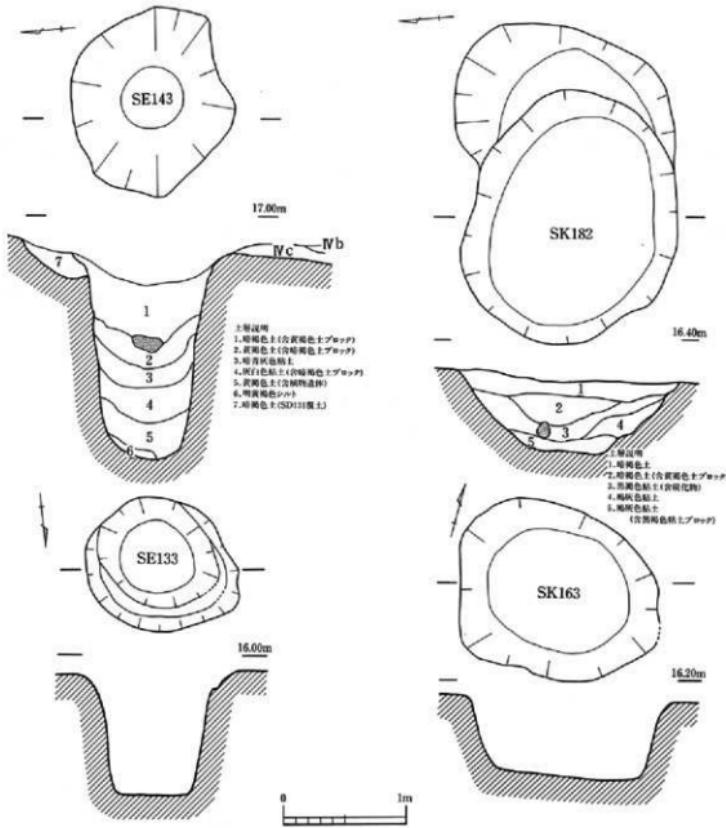
掘立柱建物

SB 226（第21図）3B18の自然堤防北斜面に位置する。東廻付南北棟建物（東偏6度）である。建物の規模は南北6.6m（3間）・東西5.1m（3間）を測り、梁間の寸法は等間でない。柱掘形は径30cm前後の円形をなし、深さは身舎で40~70cm、廻で10~20cmを測る。掘形埋土は全てIV b層に近似した暗褐色土である。各柱穴からは全く遺物が出土しなかったが、SK 182によって柱穴が破壊されている事と覆土から平安時代の造構と考えられる。

溝

3B18・19で8本発見されており、自然堤防の肩部に集中している。

SD 129（第21・24図）発掘区南西隅に始まり、3B18堆d付近ではほぼ真東に屈曲している。また屈折部



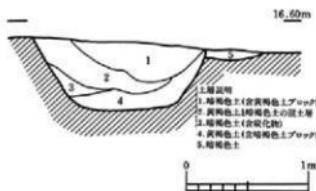
第23図 SE133, 143, SK163, 182 平・断面図

を境に急激に深くなっている。この部分でかなりの段差を形成している。溝の幅及び深さは、3B18号d以南で1.1m・5cm、同以東で1.5m・60cmを測り、断面形は共に逆台形をなす。底部のレベルは南→北・西→東へと順次低くなっている。本溝は覆土の状況により人為的に埋められたものと考えられ、その理土より須恵器長頸壺（第26図2）と土師器塊（第26図3）

が検出されている。切合い関係から本溝はSD 210、SD 131より新しい。

SD 128（第21図） ほぼ東西に走り、底面のレベルは南から北へ僅かに低くなっている。幅30cm・深さ10cmを測る。断面は逆台形をなし、暗褐色粘土質土を覆土としている。本溝からは須恵器無台壺の細片が1点出土している。

SD 210（第21図） SD 128の延長線上にあり、断面形



第24図 SD129土層断面

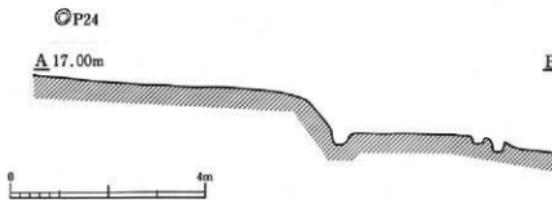
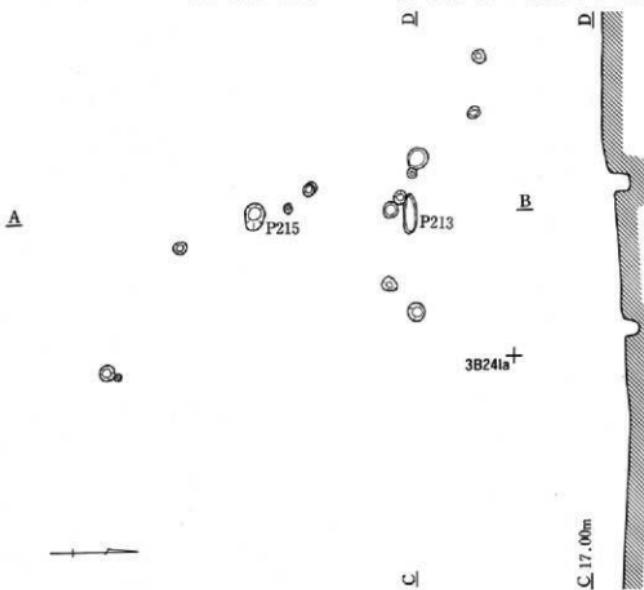
及び覆土の状況も近似する事から、同一の溝の可能性がある。本溝はSD 129に切られている。

SD 135 (第21図) ほぼ東西に走り、幅70cm・深さ8cmを測る。断面は扁平な「U」字形をなし、暗褐色土を覆土としている。本溝から全く遺物が出土しなかった。

SD 131 (第21図) SK 182から始まり、等高線に沿って南東の方向へ伸びている。底面のレベルは、SE 143を境界に両側に低くなる。幅40cm・深さ30cmを測り、断面はU字形をなす。本溝は暗褐色土を覆土とし、その中から土師器細片が微量出土した。切り合い関係からSD 129・227、SK 182、SE 143より新らしい。

SD 132 (第21図) SD 131と直交するもので、幅30cm・深さ30cm、断面はU字形をなす。底面のレベルは南から北へ低くなっている。覆土は暗褐色土である。遺物は全く出土しなかった。本溝は規模、形態、覆土がSD 131と近似し、両者の切り合いも確認されなかった事から、同時に存在していたものと思われる。

SD 163 (第21図) SB 226の東西に存在し、底面のレベルは南から北へ僅かに低くなっている。幅30cm・



第25図 A地点東地区遺構 平・断面図(下層)

深さ2cm、断面は扁平なU字形をなす。暗褐色土を覆土とし、遺物は全く出土しなかった。本溝はSB 226の雨落ち溝と思われる。

SD 227 (第21・22図) 前述したように、水田跡に伴う用水路と考えられる。

下層の遺構 (第25図)

性格不明のピットが17確認されている。掘り込み面はⅣc層下部である。このうちP213~215から土師器細片が出土している。遺構の年代は、覆土であるⅣc層が純粹に平安時代の遺物を包含している事から、ほぼその時期に比定されるものと思われる。

(田中靖)

4. 東地区的遺物

今回の調査で出土した遺物としては、須恵器、土師器、中世陶器、土師質土器、近世陶磁器、砥石があり、総量は平箱で2箱である。また遺物の90%以上はⅣb、Ⅳc層から出土したもので、遺構に伴った例は極めて少なかった。以下種別に遺物を説明する。

須恵器 (第26・27図)

無台壺 (第26図1) Ⅳc層から出土した。底部と体部の境界が丸味を帯び、口縁部はやや直立気味に立ち上がる。内外面はロクロナデで、それによる凹凸が顕著になっている。底部はヘラ切りである。

長頸壺 (第26図2、図版9-2) SD 129から出土した。底部は回転糸切りの後、幅広い高台が付けられている。底部内外面は丁寧にロクロナデされ、回転糸切り痕は不明瞭となっている。本例は成形が極めて丁寧である事や、底部の形状から水瓶の可能性もある。

短頸壺 (第26図6、図版9-3) SK 182から出土した。本例は極めて作りが丁寧で器壁も薄く仕上げられている。内外面ロクロナデで、外面には厚い自然釉が見られる。

横瓶 (第27図1) Ⅳb層から出土した。外面は平行叩きの後カキ目が施され、内面は同心円叩きである。

甕 (第27図2) P62から出土した。外面は細かい格子目叩きで、内面は横ナデにより叩き痕が消されている。

土師器 (第26・27図)

壺 (第26図3・4 図版9-7・8) 3はSD 129より出土した。内外面はナデ成形で、底部は左回りの回転糸切りである。4はI層から出土したもので、風化が著しい。

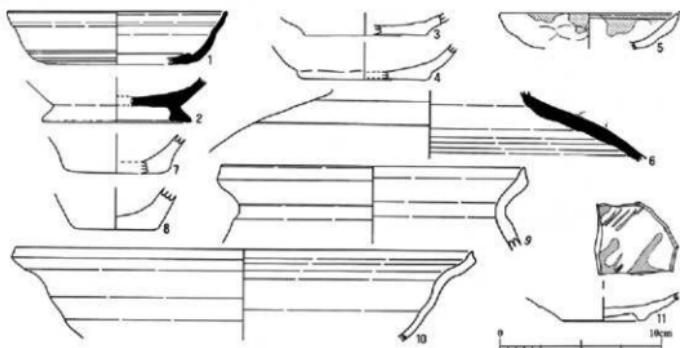
壺 (第26図10) Ⅳc層から出土した。頭部の屈曲が少なく、口縁端部はつまみあげられ小さな端面を有している。内外面ロクロナデである。

甕 (第26図7~9、第27図4、図版9-5~6) 7はⅣc層から検出されたもので、風化が著しい。内外面ロクロナデで、胎土に多量の砂粒を含んでいる。8はⅣc層から唯一検出されたもので、かなりローリングを受けている。器壁の厚さと比較して著しく底径が小さい事や胎土の状況から古式土師器と思われる。9はⅣb層から検出されたもので、口縁端部がつまみ上げられ端面を有している。内外面ロクロナデである。第27図4はⅣc層から検出されたもので、外面は格子目叩きが施され、内面は粗い刷毛目調整である。

中世陶器 (第27図)

3は珠洲焼の甕で、水田跡1の耕作土より出土した。外面は平行条線叩きで、内面にはおさえの凹痕がある。

土師質土器 (第26図)



第26図 A地点東地区出土遺物（須恵器、土師器、近世陶磁器）

5は燈明皿で、水田跡1の耕作土より出土した。口縁は強く横ナナドされ溝縁状をなし、外面は指頭痕を残している。内外面スヌ状の炭化物が付着している。

近世陶磁器（第26・27図、図版9-19）

第26図11は伊万里焼の染付皿で、水田跡1の耕土から出土した。高台はケズリ出しで、疊付は施釉されていない。またこの部分には砂が付着している。呉須の発色はあまり良くない。第27図5は産地不明の唐鉢で、I層より出土した。口縁は内そぎ状で、端部は鋭角である。内面の卸し目は7本備の櫛で施されている。

砾石（第28図、図版10-8）

28（8）は砂岩を石材とした置砾石で、I層から出土した。正・裏・両側辺の4面を作業面にしている。本例は火熱を受けしており、表面が赤変している。

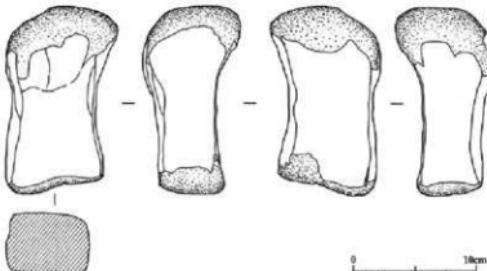
次に遺物の年代的位置づけを簡単に挙げる。第26図1は器高が低く、口縁部の立ち上がり状況から、今池編年Ⅳ期（坂井 1984）すなわち9世紀後半に位置づけられる。また同じⅣb層から出土した第26図7・10もほぼ同時期のものと思われる。Ⅳc層から出土した遺物はⅣb層のそれとあまり時間差は認められない。しかし時期差を明示しうる資料が出土していないため、詳細は不明である。SK 182出土の第26図6は、平城宮跡SD 650出土土器（町田 1974）に類例があり、9世紀後半に位置づけられる。SD 129出土の第26図2は今池遺跡SK 257の水瓶（坂井 1984）に近似している。しかし同様の底部形態は、猪投塚編年（橋崎・齊藤 1983）の鳴海32号窯式から里塙14号窯式の瓶類に見られる事や、共伴している第26図3の形態から、9世紀後半に位置づけるのが妥当と書えられる。

水田耕作土から出土した遺物は古代～近世に及ぶ時期のものが見られる。第26図5は口縁端部が溝縁状をなし、外面に指



第27図 A地点東地区出土遺物（須恵器、土師器、中・近世陶磁器）

頭痕を残す事から、御館遺跡（荒川 1985）出土土器に対比され、15世紀～16世紀に位置づけられるよう。第26図11は高台径が小さく、量付きに砂が付着している事や鼻須の発色が悪い事から、肥前系陶磁器の編年のⅡ期（大橋 1984）、すなわち17世紀前半に位置づけられるよう。（田中靖）



第28図 A地点東地区出土遺物（石器）

第3節 高畠遺跡A地点水路分の調査

A. 調査の経過

本調査は、高畠遺跡A地点に北陸自動車道建設に伴い水路が施設されるため行われた。発掘範囲は東西約50m・南北約3mで発掘面積は150m²余りであった（第11図）。調査は昭和58年7月6日から27日（実働13日）まで実施され、発掘区の設定・表土剥ぎなどに使用するバックフォーについては5月13日の協議に基づき公團に協力を依頼した。

7月7日より表土剥ぎを開始し、9日には層序を確認する。11日には造構確認に着手し、翌日には終了する。その結果、溝1・井戸1・土坑2・竪穴状造構1・ピット20を確認する。13日からは造構掘りを開始し、14日には井戸の発掘・写真撮影・実測を行う。20日に造構掘りがほぼ終り、22日には実測を完了する。25日には梅雨の晴れ間をみて写真撮影を行い、バックフォーで井戸の半截及び深掘りを始める。27日にはこれらの調査も全て完了し、水路部分を公團に引き渡す。

(寺崎裕助)

B. 層序（第29図）

本調査区の層序は下記に示すとおりで、第29図は3B9Ⅵgの土層柱状である。

I層 表土である。黒褐色を呈し、厚さ25cmを測る。他の地点のI層と同様に土師器・珠洲焼・近世陶磁器が出土している。

Ⅵ層 上部は耕作又は杉の根などの擾乱を受けたため、表土がブロック状に混入しているが、下部はきれいな褐色である。造構は全てこの面で確認された。

I
VI

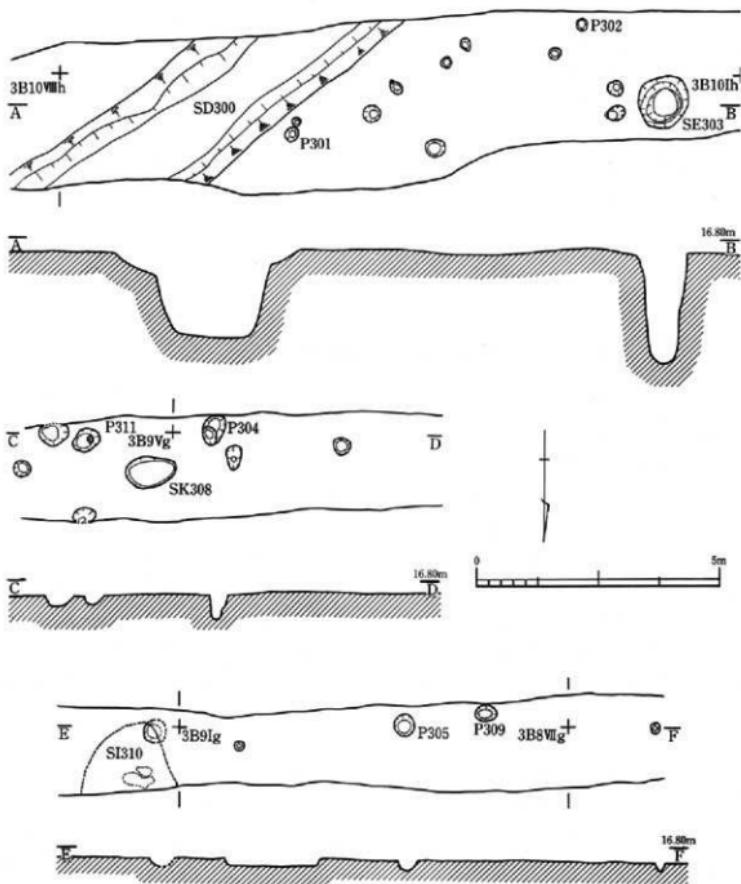
第29図 A地点東部部分土層柱状図
(寺崎裕助)

C. 造構

本調査では竪穴状造構1・井戸1・溝1・ピット23が検出された。

SI 310（第30図） 3B9Ⅰgに位置するが、約半分が調査区外となっている。壁は確認できなかつた。しかし、黄褐色土（Ⅵ層）が部分的に堅く踏み固められて床面状を呈していた。そのほぼ中央には厚さ2～4cmで40×60cmの範囲に焼土の散布が認められた。またSI 310より60cm余り東からは土師器片（第33図2・11、図版9-22・26）が多く出土した。

SD 300（第30-31図、図版5下、図版6-中）3B10Ⅳ～Ⅶg～Ⅰにかけて位置し、南西から北東へと調査区内を横断している。幅2.6m・確認面からの深さ1.3mである。断面は「U」字形を呈し、その覆土は11層に区



第30図 A地点水路部分造構 平・断面図

分される。上層（1・2層）は暗褐色土、中層は黄褐色土（3・4・5層）である。下層（6・7・8・9・10層）は灰色土が基調となり、黄色土又は褐色土が混入し、炭化物も含まれる。最下層（11層）は黒褐色土で炭化物を含み、植物遺体が出土する。須恵器（第33図1・15、図版9-23）、土師器（第33図5-7・9・10・14、図版9-21・24・25・27）が上・中層より出土している。

SE 303（第30・32図）3B 1 hに位置する。直徑約1mの円形で確認面から底面までの深さは1.8mを測る。底面はやや先尖りになるが開口部へとゆるやかに外反する。覆土は暗褐色を呈し、粘性が強い。深さ1.5mの所で參かく人頭大の甕が6個検出された。それより下位には木片を含んだ黑色土が堆積していた。株洲焼（第33図16・17、図

版 9-29)・青磁(第33図4、図版9-17)・曲げ物(第34図)が出土しており、曲げ物は最下部付近から発見された。

ピット(第30図)3B9Ⅲ-Xg付近を除くほぼ全域で検出された(註8)。口径20~60cm・深さ10~55cm余りの規模をもつが、口径・深さとも20cm余りのものが多くみられた。調査範囲が限られているため、掘立柱建物の柱穴のように規則正しく並ぶものは認められなかった。遺物が出土したピットはP.301-302-304-305・309・311の6基で、いずれも土師器であったが、小破片のため詳細は不明である。

(寺崎裕助)

D. 遺 物

本調査で出土した遺物は須恵器、土師器、中・近世陶磁器及び曲げ物である。近世陶磁器は表土層上部から若干出土したのみであった。須恵器・土師器は竪穴状造構・溝・ピットから、中世陶磁器は井戸から出土している。

須恵器(第33図1・12・15・18、図版9-20・23・24)

1(23)は長頸壺又は短頸壺の底部である。暗灰白色を呈し、胎土・焼成とも良好である。12(20)は壺蓋である。天井部内面は磨耗しており、炭の付着もみられることから転用硯と考えられる。15・18(23)は甕胴部で内外面に叩き目がみられる。1・15はSD300より出土している。

土師器(第33図2・5~11・13・14、図版7-4・図版9-21・22・25~28)

壺(第33図5~7・11、図版7-4・図版9-22・26)5(4)・7(26)・11(22)の底部には回転糸切り痕がみられ、5・6・7の底部は板状を呈し、体部は若干屈曲して立ち上がり、底部と体部の境界も明瞭である。5~7はSD300より、11はSI310より出土している。

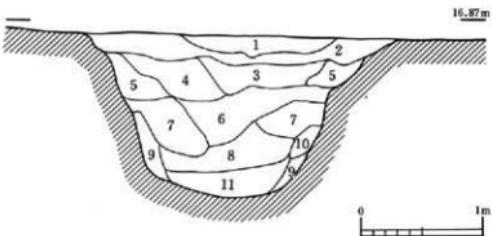
塊(第33図9・10、図版9-21・25)高台は外反し、端部は尖っている。内面はいずれも黒色処理が施されており、9(25)の内面には「X」字状と推定される暗文がみられる。とともにSD300より出土している。

甕(第33図2・8・13、図版9-27)2(27)の底部には回転糸切り痕がみられる。13は「く」の字状に立ち上がる口縁を持ち、口縁端部が短く直立する長胴の甕と推定される。SI310より出土している。

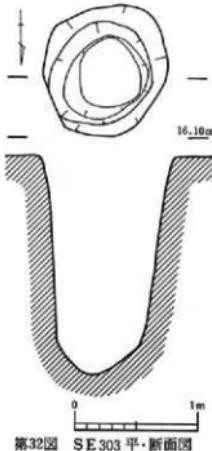
塊(第33図14、図版9-28)・口縁はやや外反して立ち上がり、端部は短く直立する。胎土中に細かい砂粒が目立つが焼成は良好である。内面にはススの付着がみられる。SD300より出土している。

中世陶磁器(第33図3・4・16・17、図版9-29・30)

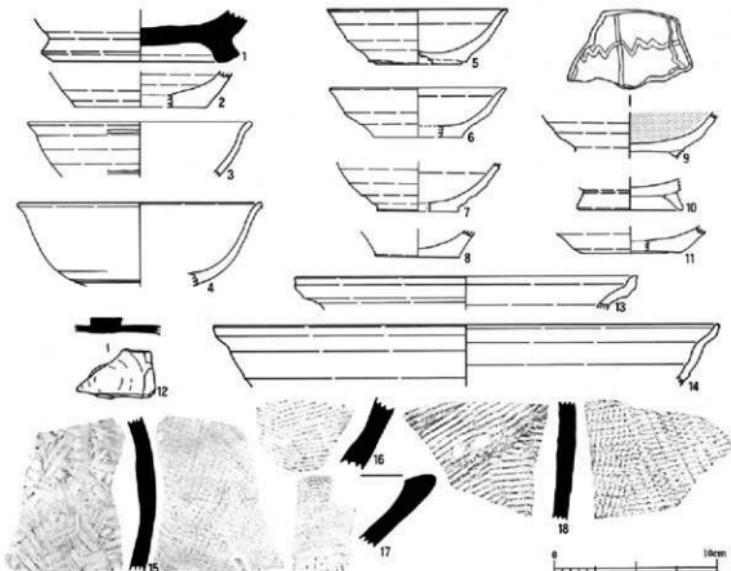
註8 3B9Ⅲ-Xg付近は自然堤防東斜面の際に位置し、自然堤防頂部との比高差は60cm余りである。この自然堤防は形状から見て、土取り等で跡跡部が削られた可能性があり、その際ピットなどの遺構が破壊されたことも考えられる。



第31図 SD 300 土層断面図



第32図 SE 303 平・断面図



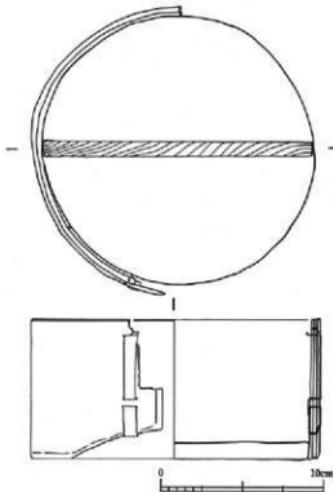
第33図 A地点水路部分出土遺物（須恵器、土師器、中世陶磁器）

珠洲焼（第33図16・17、図版9—29）16は甕の胴部破片である。表面には断面「V」字状の叩き目がみられる。17（29）は擂鉢で口縁部は肥厚し、内側に突出する。口唇部には波状文が付され、体部内面の全面には鉄し目が施されているものと思われる。両者ともSE 303より出土している。

青磁（第33図3・4、図版9—30）いずれも口縁が外反する碗で釉が比較的厚くかけられており、全体に純い感じがする。3には暗緑色の釉が、4（30）には暗紫灰色の釉がそれぞれ施釉されている。4はSE 303より出土している。

木器（第34図）

曲げ物がSE 301より1個体出土したのみである。底板は径の大きい面が内面となっており、側面には削り痕が顕著であるが木釘痕はみられなかった。側板は2枚重ねで、内側には縦方向や斜方向に鋸目がみられる。止め具は桜の樹皮である。



第34図 A地点水路部分出土遺物（木器）

このような遺物の中において、SD 300から出土した壺（9・10）は、内面に黒色処理が施されており、暗文もみられることから、上越市一之口跡遺跡河川出土遺物（田海 1985）に酷似しており、11世紀後半に比定される。同溝から出土した壺（5～7）も底部と体部の境界がはっきりしているなど10世紀後半以降の特徴（坂井 1984）を有している。SE 303から出土した17は口唇部に波状文をもつことから15世紀前半（V期）の年代（吉岡 1981）が与えられよう。SE 303からは中世陶器のほか曲げ物（第34図）と礎6個が出土している。曲げ物は出土状況からかんがみて、井戸の「まなこ」（四柳 1984）ではないかと推定され、礎6個は出土状況からみて井戸廃絶時の祭祀の痕跡であろうと思われる。この二者の類例は石川県西川島跡群（四柳 1980）にみられる。

(寺崎裕助)

第4節 B地点の調査

A. 調査の経過（第11図）

先述したように本地点は、北陸自動車道の工事用道路建設中の昭和58年6月2日に遺物が採集されたことによって発見された。その所在地は11トレンチの南東側に隣接する4B12Ⅷ～X a～d、4B13I～X a～d、4B14I～IV a～d付近であり、自動車道法線内における面積は140m²余りであった。この頃は二次調査（試掘）の最中で、発見直後に工事関係者と現場協議を行った。その結果、二次調査よりも工事用道路建設を優先することになり、二次調査を一時中止し、早急にB地点の発掘調査に着手することになった。発掘調査は昭和58年6月3日から14日まで（実働8日）行われた。調査に際しては上越市学芸員小島幸雄、同文化財調査員中村美恵子の両氏から協力を得た。

6月3日の午前中より造構確認を行い、住居跡1とピット数十基を検出し直ちに造構発掘に着手する。8日には調査をほぼ終了し、バックフォーで調査面下1.5mまで深掘りを行うが新たな遺物包含層は確認されなかった。10日には調査区西端で井戸1を検出、直ちに発掘を行う。この井戸も13日には調査を終了し、翌日には半蔵して底部の確認を行い、全ての調査を完了する。

(寺崎裕助)

B. 層序

本地点では、最上面に黄橙色を呈し、砂、小礎を多く含む厚さ10cm余りの盛土がみられた。その下位には表土及び遺物包含層はみられず、直ちにⅧ層（褐色土）となっている。Ⅷ層上面には明黄褐色土ブロックが混入しているが、下部は明褐色土となる。Ⅸ層は造構確認面下1.4mまで続き、Ⅹ層となる。なお、この地点の周辺は、宅地造成時に削平を受けていると考えられることから造構上面は削り取られている可能性が強い。

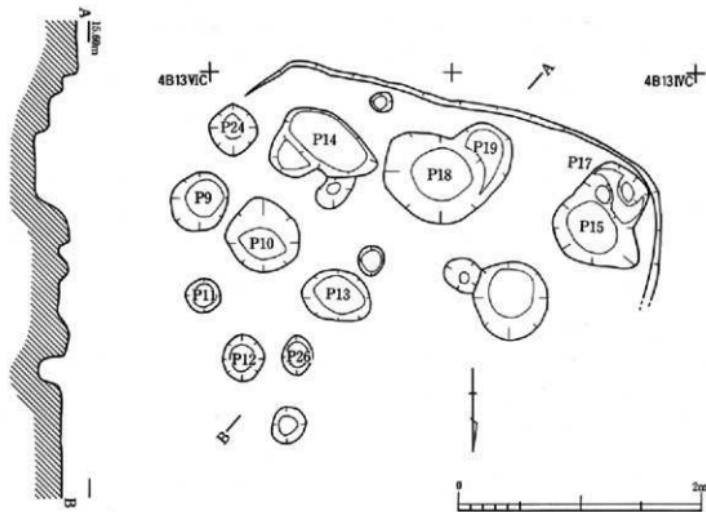
(寺崎裕助)

C. 遺構

本地点からは竪穴住居1・溝1・井戸1のほか32のピットが検出された。

SI 1B（第35図・第36図、図3-1上、図版4-1上）4B13IV～VIcdに位置する。自然堤防の崖線上に立地するため、一部分が崩落などで破壊されている。平面形は、コーナーが2箇所確認されたことから1辺約3.2mの方形と推定される。壁は南側が検出され、壁高は6cmでゆるやかに立ち上がっている。カマドは確認されなかつたが、床面より19のピットが発見された。P14・P15・P18は、黄褐色土ブロックの下から検出され、覆土に炭化物を含むなど他のピットとは異なる様相を呈していた。P10の覆土上面は炭化物を若干含む焼土であった。遺物としては須恵器の壺、土師器の甕など第38図の殆ど（1・4・23・25を除く）が出土した。

SD 1B（第35図）4B13V～VIdに位置する。東側と西側は崖線できられているため延長方向



第36図 SI 1 B 平・断面図

は不明である。開口部幅60cm・底面幅40cm・深さ15cmを測り、断面「U」字形を呈する。遺物としては、土師器の甕（第38図12）が出土しているのみである。

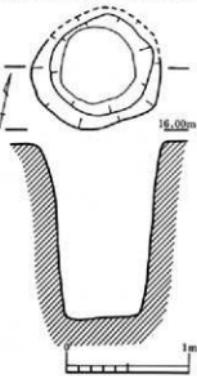
SE 1 B（第35図・第37図） 調査区西端の4B7番区に位置する。平面形は円形で、断面形は細長い「U」字形を呈し、開口部直径1m・底部直径60cm・確認面からの深さ1.45mを測る。覆土は確認面下45cmまでは暗褐色土が基調となり、その中に黄褐色土ブロックが混入するほか径2~3cmの小礫及び炭化物が含まれている。45~80cmの間は暗褐色土・灰黃褐色土・黃褐色土が混在しており、径5~10cmの礫や炭化物を含んでいる。80~130cmの間は灰黃褐色土とびい黄橙色土が入り混っており、径10cm余りの礫も認められた。130cm以下にはびい黄橙色土と灰黃褐色土が混りあっており、酸化鉄の付着が目立ってくる。遺物は、確認面下40cmと90cmで土師器または土師質土器と思われる小片が1片づつ出土している。また、60cmの所からは径10cm余りの礫が30個ほどかたまって出土しており、A地点水路部分のSE 303など同様に廃絶時に祭祀がとり行われた可能性もうかがえる。

ピット（第35図） SI 1 B の床面以外に32のピットが検出された。それらのピットの規模は径20~50cm・深さ10cm内外を測り、小規模で浅いものが多い。遺物はP 2・P 33で土師器甕（第38図23・25）、P 36で須恵器の壺蓋（第38図1）が出土している。
（寺崎裕助）

D. 遺 物

本地点からは須恵器・土師器が出土しているが、その全ては遺構内からの出土である。

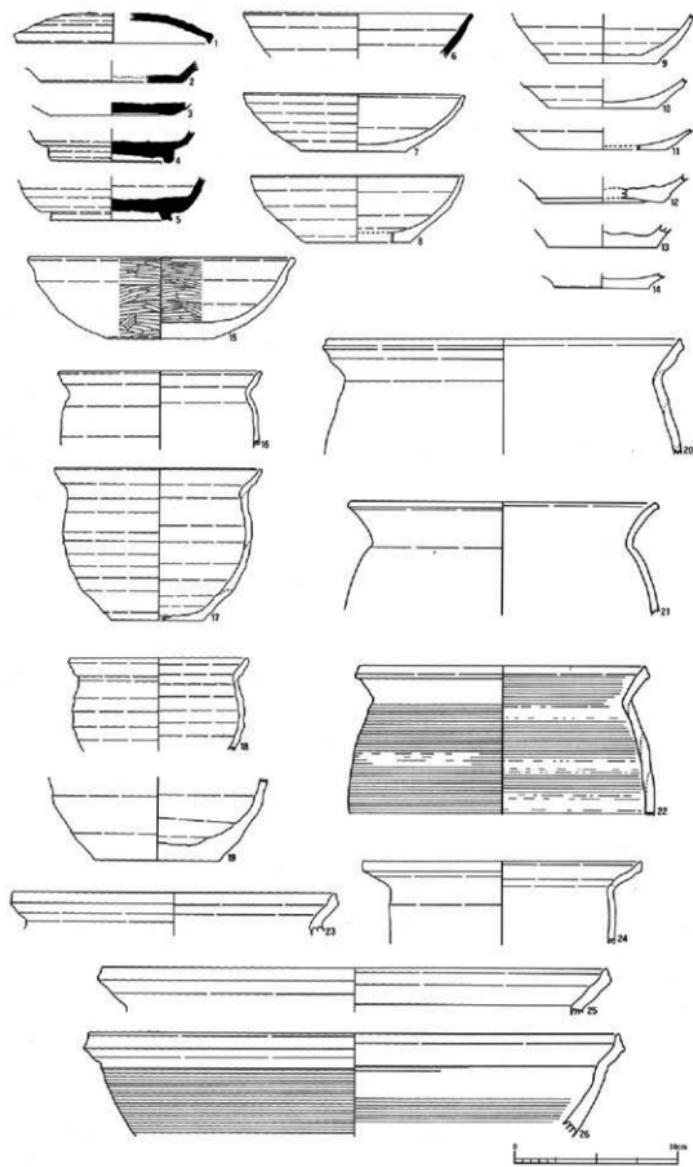
須恵器（第38図1~6、図版10-1・2）



第37図 SE 1 B 平・断面図



第35図 B地点造構 平・断面図



第38図 B地点出土遺物（須恵器、土師器）

壺と壺蓋が出土している。

壺（第38図2～5、図版10-1・2）有台壺（第38図4・5、図版10-1・2）と無台壺（第38図2・3）がみられる。2・5（2）の底部にはヘラ切り痕が、3・4（1）の底部には糸切り痕が認められる。5の体部下半は丸く、4の底部と体部の境界は明瞭である。2・3・5はSI1Bからの出土である。

壺蓋（第38図1）1点のみ出土している。天井部には回転ヘラ削り痕はみられず、縁部はやや屈曲し、端部は内湾ぎみで尖っている。P36より出土している。

土師器（第38図7～26、図版7-5・8・9・14・16・19、図版10-3～6）

壺と甕、壠が出土している。

壺（第38図7・8・10・11・14・15、図版7-5・8・9、図版10-5）14（5）・15（9）の底部切り離しは糸切りであるが、他のものは器面の風化が激しく不明である。15は他の壺とは異なり、内外面とも丁寧にヘラ磨きが加えられている。体部と口縁部の境界には稜線がみられ、口縁外面は浅くくぼんでいる。いずれもSI1Bからの出土である。

甕（第38図9・12・13・16～25、図版7-14・16・19、図版10-3・4）口径と底径から小形のもの（第38図9・12・13・16～18）と大形のもの（第38図19・20・22～25）に2分される。大形の甕の口縁部は「く」の字状に立ち上がり、端部は屈曲して短く直立する。底部（第38図9・12・13・17・19、図版10-3・4）の全てには糸切り痕が認められる。21は肩部に棱線をもち、口縁部は「く」の字状に外反して立ち上がり、端部の外面はくぼみ、口唇部には面を持つなど他の甕とは形態が異なる。胎土も粗く、チャートの粗粒を多く含んでいる。9・12・13・16～22・24はSI1B、23はP33、25はP2より出土している。

壠（第38図26、図版10-6）口縁はゆるやかに外反し、甕と同じく端部は屈曲して短く直立する。内外面にはカキ目調整が施されており、胎土・焼成は他の土師器に比して良好である。SI1Bより出土している。

これらの遺物の中で、土師器は甕や壠の口縁端部が屈曲して短く立ち上がり、甕の底部切り離しが糸切りであることから今池遺跡SD3出土の土師器（坂井 1984）に比定でき、9世紀後半の年代が与えられよう。これに伴う須恵器もほぼ同年代のものであろう。ただ第38図21の土師器の甕は他の遺物と時期が異なり、類例が中之島村杉之森遺跡（戸根 1976）や六日町金屋遺跡（山本 1985）などにみられることから5世紀中葉に位置づけられるであろう。

（寺崎裕助）

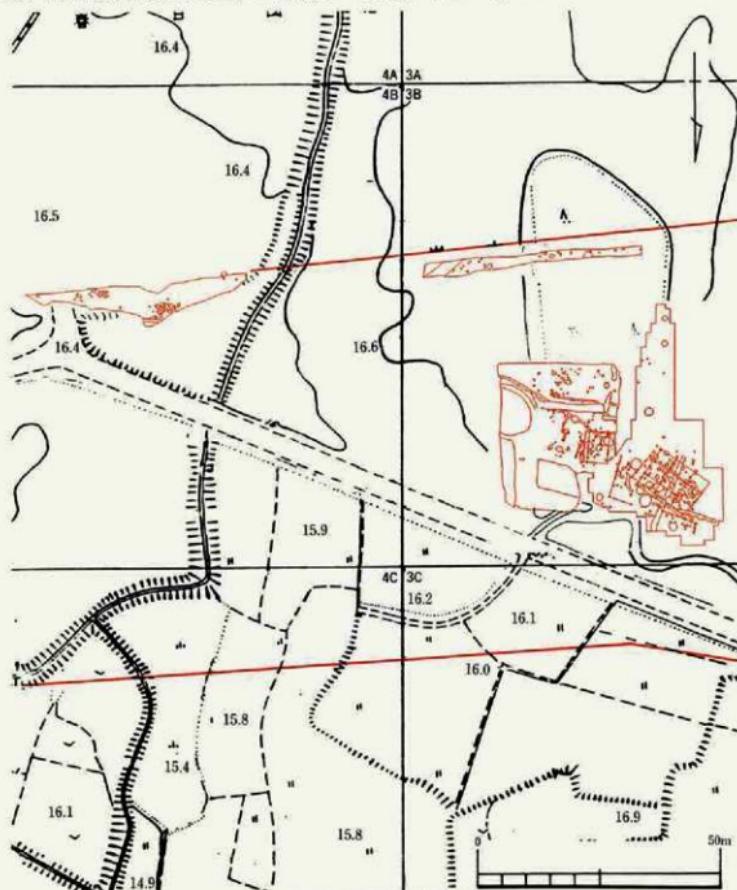
第IV章 総 括

高畠遺跡は、試掘調査の結果からA地点とB地点とに区分され、発堀調査が実施された。調査の結果を以下にまとめる。

A 地点（第39図・第40図）

自然堤防上に立地する遺跡である。遺構は、掘立柱建物を中心に井戸・土坑などが集中して検出された。また遺跡北側の沖積地では中世から近世に至る時期の水田跡が検出されている。遺構の切り合いで柱穴の覆土から平安時代の掘立柱建物と考えられるSB226は、東廂を付し桁行3間(6.6m)×梁行3間(5.1m)を測る。建物の規模、円型で小型の柱穴、出土遺物から中世の遺構と考えられる掘立柱建物はSB222・223の2棟である。SB222は、桁行3間(12m)×梁行3間(9m)の縦柱となり、P4から珠洲焼の擂鉢片が出土した。SB223は、桁行4間(13m)×梁行2間(6m)で、P30から珠洲焼の擂鉢片が出土している。井戸は19

基・土坑は7基検出されている。井戸は平面形が円形あるいは楕円形となる。掘り形は垂直に近く開口部へ向けてやや開いており、深さは遺構確認面下2m以内である。春日・木田地区では珍しい石組井戸が2基検出されている。井戸からは、土師器、土師質土器、珠洲焼などが少量出土している。内訳は、土師器を出土する井戸が8基、珠洲焼等中世の遺物を出土する井戸は7基である。このうち、出土遺物の年代的位置づけが可能なものは僅かである。SE 7からは14世紀中葉から後半に至る時期に比定される青磁碗（第17図15、図版9-15）（上田 1982）が出土した。SE 52からは14世紀に比定される珠洲焼の盃（第18図18、図版9-10）が、SE 303からは15世紀前半に比定される珠洲焼の擂鉢（第33回17、図版9-29）が出土している。土坑は開口部径が1.1~2.5mと幅があり、深さは遺構確認面下1m以内である。SK 182からは9世紀後半に比定される須恵器短頭壺（第26図6、図版9-3）（町田 1974）が、SK 21からは15世紀前半に比定される珠洲焼の擂鉢（第18図14）が出土した。溝は12本検出された。遺物が出土した溝は少ない。SD 129からは9世紀



第39図 高畠遺跡遺構配図

後半に比定される須恵器長頸壺（第26図2、図版9-2）が、SD 300からは11世紀後半に比定される土師器の壺（第33図9-10、図版9-21・25）（田海 1985）が出土している。沖積地の水田跡は、出土遺物とIV b層との切り合い及び更正図より中世から近世に至る時期に存続したものと考えられる。このほか、自然堤防上には近世の遺物が出土しているが、近世の造構と明確に判断できるものは検出されなかった。

B地点（第39図）

東端の自然堤防に立地する遺跡である。竪穴住居址・井戸・溝・ピットが検出されている。SI1Bは1辺3.2mで平面形は方形となる。9世紀後半に比定される須恵器・土師器が出土している。SE 1Bからは年代的位置づけの可能な遺物は出土しなかった。本遺跡は造構・遺物の検出状況から法線外南側の自然堤防上に統くものと考えられる。

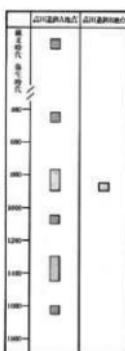
（肥田野弘之）

まとめ（第3表）

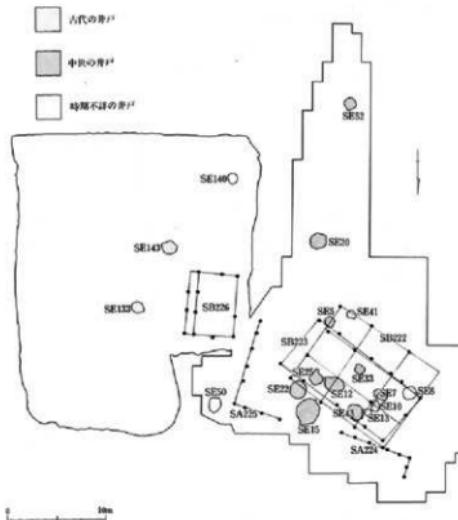
先述したように、本遺跡では、平安期の造構が2地点・中世（14・15世紀）の造構が1地点自然堤防上に検出されたほか、縄文土器・古式土師器・奈良時代の須恵器・近世陶磁器などの遺物が出土している。また試掘調査の際の層序観察などによって、本遺跡が立地する自然堤防近辺の沖積地は、奈良時代以前河川であった可能性が強いと推定されるに至った。本遺跡の造構・遺物・地形をそのような観点からみてゆくと次のようない推測が可能ではなかろうか。

すなわち、奈良時代以前の本遺跡近辺には河川（正善寺川？）が流入し、その自然堤防上にはかすかな生活の痕跡がみられるにすぎなかった。平安期には流入していた河川もその流路を変え、河川跡も湿地化したものと考えられる。そして、自然堤防上には集落が進出し、周囲の湿地には開発の手が加わり水田化していく。このような状況は一時中断するものの中世（14・15世紀）にもみられ、平安期及び中世が本遺跡のピークであったものと思われる。このことは検出された造構の全てがこれらの時期に存続していたであろうという事実からもう裏づけられる。また、今回の調査でこの自然堤防上に近世集落が営まれたことを積極的に示す造構や遺物は発見されなかったこと、明治28年の土地更正図では畠地が多かったこと、周辺の沖積地には近世に存続した可能性の強い水田跡が検出されたことから、近世以降この自然堤防上は畠地、周辺の沖積地は水田となっていたと考えられる。

（寺崎裕助）



第3表 高畠遺跡の井戸



第40図 高畠遺跡A地点建物・井戸配置図

引用文献

- 荒川正明 1985 「遺物」『御館』 新潟県小国町教育委員会
- 岡本都栄 1985 「地理的環境」『上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅰ』 新潟県教育委員会
- 大橋康二 1984 「国内出土の肥前陶磁」 佐賀県立九州陶磁文化館
- 川上貴夫 1987 「土器類」『水原城跡及水原代官所址発掘調査報告書』 新潟県水原町教育委員会
- 木村宗文 1985 「歴史的環境」『上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅰ』 新潟県教育委員会
- 駒形敏朗 1976 「中世陶磁器・株洲系土器」「焼屋敷跡・杉之森遺跡」 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1984 「今池遺跡群における奈良・平安時代の土器」『上新バイパス関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ』 新潟県教育委員会
- 田海義正 1984 「遺構各説(井戸)」「上新バイパス関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ」 新潟県教育委員会
- 田海義正 1985 「(付編)一之口遺跡4区 河川跡出土遺物」『上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅰ』 新潟県教育委員会
- 寺崎裕助 1985 a 「調査の経過」『上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅰ』 新潟県教育委員会
- 寺崎裕助 1985 b 「調査に至る経過(池田遺跡)」「上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅰ」 新潟県教育委員会
- 寺崎裕助 1985 c 「層序」『上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅰ』 新潟県教育委員会
- 戸根与八郎 1976 a 「周辺遺跡の概要と出土遺物」「杉之森遺跡」 新潟県教育委員会
- 戸根与八郎 1976 b 「中世陶磁器・土師質土器」「焼屋敷跡・杉之森遺跡」 新潟県教育委員会
- 戸根与八郎 1984 「遺構各説(中世)」「上新バイパス関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ」 新潟県教育委員会
- 橋崎彰一・斎藤孝正 1983 「愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)」 愛知県教育委員会
- 町田 章 1974 「VI章 E項 S D 650 出土の土器」「平城宮発掘調査報告Ⅵ」 奈良国立文化財研究所
- 宮田進一 1985 「出土遺物による時期区分」「弓庄城跡第5次緊急発掘調査概要」 富山県上市町教育委員会
- 山本 肇 1985 「金屋遺跡出土土器の年代的位置づけについて(古墳時代中期)」「金屋遺跡」 新潟県教育委員会
- 横山勝栄 1985 「調査に至る経過(57年度発掘調査)」「上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅰ」 新潟県教育委員会
- 吉岡康暢 1981 「中世陶器の生産と流通」 考古学研究第27巻第4号 考古学研究会
- 四柳嘉章・辻本馨 1980 「西川島Ⅰ」 石川県穴水町教育委員会
- 四柳嘉章 1984 「能登の中世莊園村落における信仰」石川県考古学研究会会誌27号 石川県考古学研究会





A地点西地区
完掘状態 (北から)



A地点東地区
完掘状態 (東から)



A地点東地区
完掘状態 (空中写真)



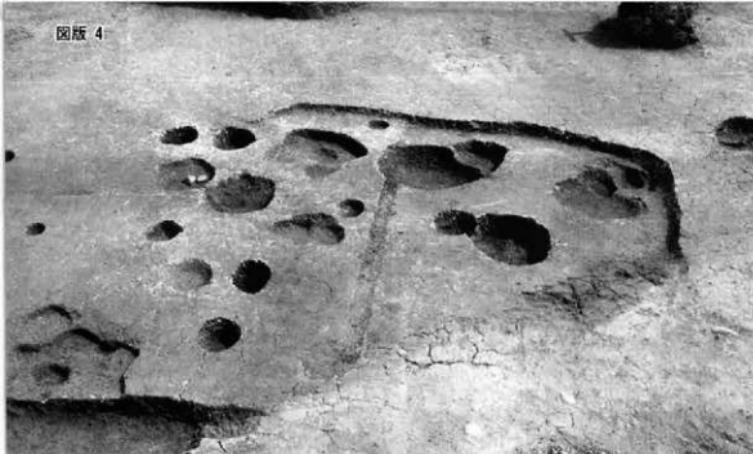
B地点
完掘状態（北から）



A地点水路部分
完掘状態（西から）



試面調査
遺構確認状態（A地点）



B地点 SI1B
完掘状態 (南から)



A地点西地区 SE.22
完掘状態

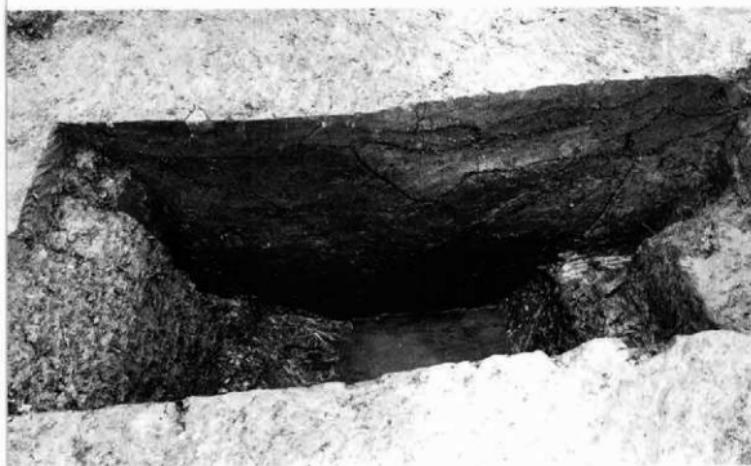


A地点西地区 SE.43
完掘状態





A 地点東地区
SD56 土層断面

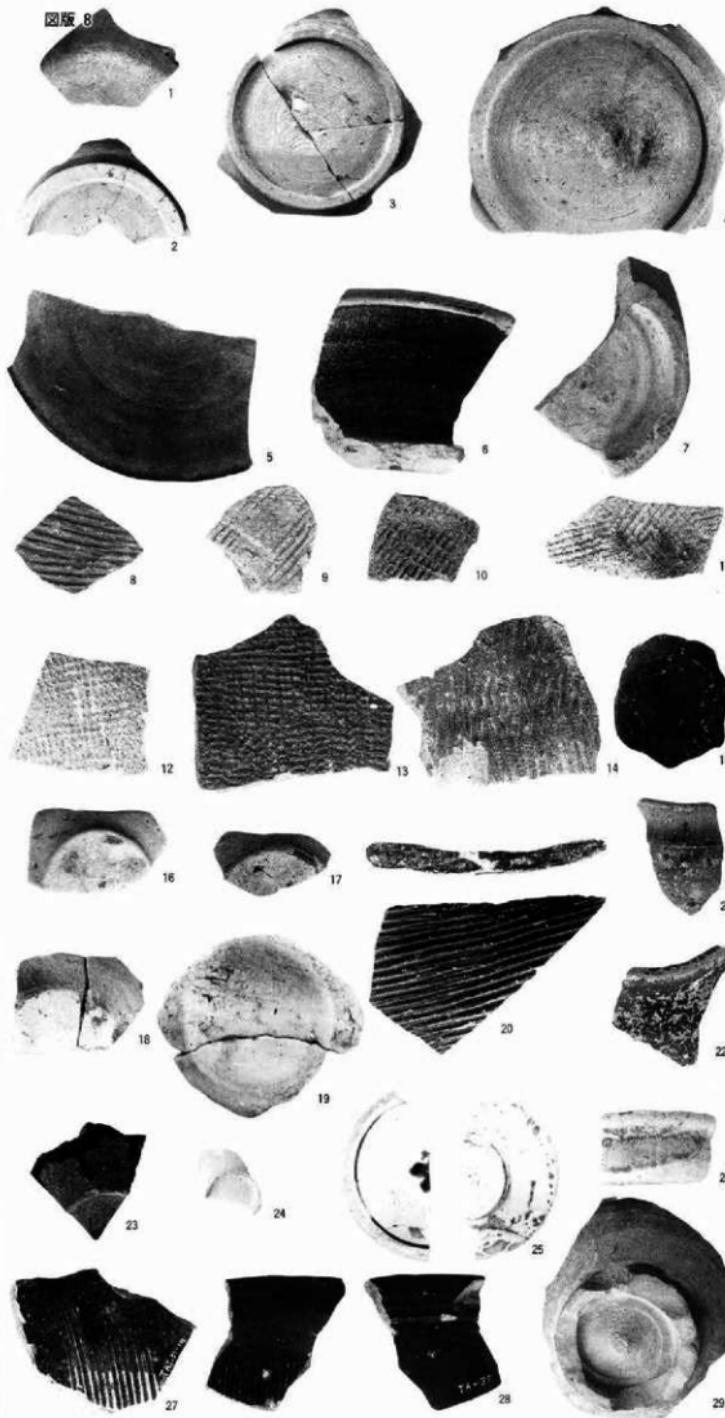


A 地点木路部分 SD300
土層断面 (北から)

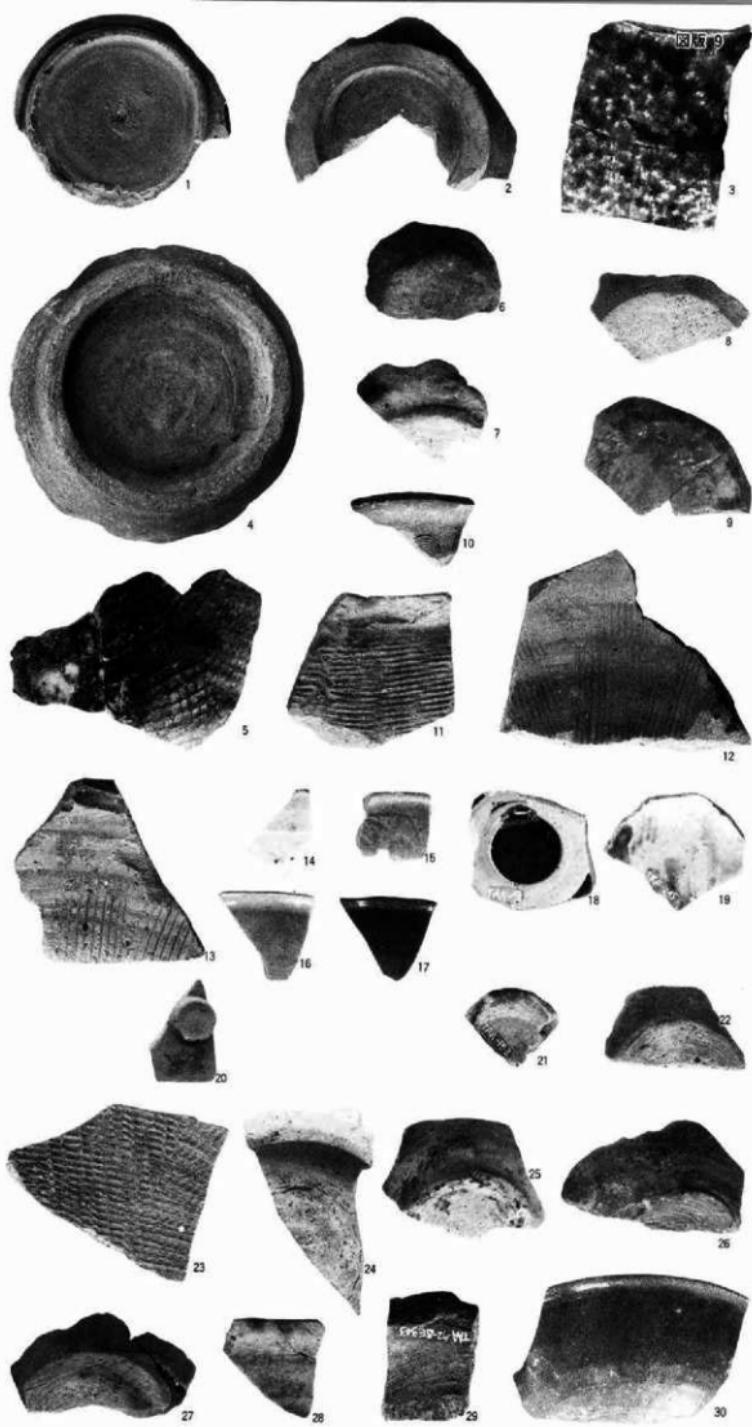


A 地点東地区
SK182 土層断面 (北から)





試掘調查出土須惠器。
土師器。中近世陶磁器
(約 $\frac{1}{2}$)



A地点、同水路部分
分出土須底器、土師器、
中近世陶磁器 (約2)



B地点出土須恵器
土器器 (約)
高烟遺跡出土石器・木器・
古錢 (7のは約半、他の約1/2)

新潟県埋蔵文化財調査報告書第42集

北陸自動車道

上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅲ

高 烟 遺 跡

昭和61年3月15日 印刷 発行 新潟県教育委員会

昭和61年3月31日 発行 印刷 長谷川印刷

新潟市学校町通1-6

☎ 0252 (28) 3309

高 烟 正 誤 表

頁	行	誤	正
5	3	混在して出土する水田で	混在して出土する。水田で
5	37	水田面	水田耕作土
7	13	5 C I IX b	5 C I IX b
11	14	蓋作	蓋物
11	38	3箇所	4箇所
12	第11図	高烟遺跡発掘調査範囲	高田遺跡発掘調査範囲模式図
13	19	未分解の	抹消
17	20	焼土プラン	焼土
27	18	実測を行う	実測を行う
29	1	(第33図4, 図版9-17)	(第33図4)
29	1	(第34図)	(第34図)
31	30	(第35図・第36図, 図3-上, 図版4-上)	(第35図・第36図, 図版3-上, 図版4-上)
35	9	須恵器短頸壺	須恵器短頸壺
35	第35図	A地点水路部分は、発掘範囲が約2m南へ移動し、法線南縁に接する。	